

2020
韓日交流
作文
コンテスト

한일교류 작문 콘테스트
作品集

募集は 7 部門

エッセイ

日本語エッセイ部門
韓国語エッセイ・中高生部門
韓国語エッセイ・一般部門

川柳・俳句

日本語川柳・俳句部門
韓国語川柳・俳句部門

韓国旅行記

日本語 韓国旅行記部門
韓国語 韓国旅行記部門

〔主催〕 駐日本国大韓民国大使館 韓国文化院、東京韓国教育院

〔共催〕 駐大阪大韓民国総領事館 韓国文化院 〔協力〕 韓国観光公社 〔後援〕 韓国コンテンツ振興院

2020

韓日交流

作文

コンテスト

한일교류 작문 콘테스트

皆さんの想いを
伝えてみませんか

〔主催〕 駐日本国大韓民国大使館 韓国文化院、東京韓国教育院

〔共催〕 駐大阪大韓民国総領事館 韓国文化院

〔協力〕 韓国観光公社

〔後援〕 韓国コンテンツ振興院





実施概要

事業名

韓日交流 作文コンテスト 2020

～ 皆さんに伝えたい想いを書いてみませんか～

募集は7部門		
エッセイ 日本語エッセイ部門 韓国語エッセイ・中文生部門 韓国語エッセイ・一般部門	川柳・俳句 日本語川柳・俳句部門 韓国語川柳・俳句部門	韓国旅行記 日本語 韓国旅行記部門 韓国語 韓国旅行記部門
応募期間 2020年8月23日(日)必着 (メールの送付日 24日朝まで)	発表 2020年9月18日(金) 韓国文化センター大ホール 当日(17日) 2020年10月17日(土) 韓国文化センター大ホール	賞状 賞状授与 決選部門1名、17名 賞状授与 決選部門2名、17名 賞状授与 決選部門3名、17名 賞状授与 決選部門4名、17名 賞状授与 決選部門5名、17名 賞状授与 決選部門6名、17名 賞状授与 決選部門7名、17名 賞状授与 決選部門8名、17名 賞状授与 決選部門9名、17名 賞状授与 決選部門10名、17名
詳しい応募方法等については韓国文化館ホームページにて随時ご案内します。 <small>●主催：財団法人韓国文化館、韓国文化館、東京韓国政府（共催）財団法人韓国文化館、韓国文化館、（協賛）韓国文化公社（後援）韓国コンテンプト事務局 ●お問い合わせ 03-3357-5870（平日10～17時） www.koreanculture.jp</small>		

【日程】

- － 作品募集：2020年4月10日（金）～8月23日（日）
- － 審査：2020年8月24日（月）～9月16日（水）
- － 審査結果発表：2020年9月18日（金）
- － 授賞式（中止）：2020年10月17日（土）

【趣旨】

次世代を担う両国の子供から一般の方まで幅広い方々を対象に、互いへの想いを伝え合い、新しい「絆」作りのためのエッセイ、川柳・俳句、韓国旅行記を募集し、表彰する。



【募集部門】 全7部門

<エッセイ>

- 日本語エッセイ部門：中学生から一般の方までが対象
- 韓国語エッセイ 中高生部門：中学生から高校生までが対象
- 韓国語エッセイ 一般部門：一般の方が対象

<川柳・俳句>

- 日本語川柳・俳句部門：小学生から一般の方まで対象
- 韓国語川柳・俳句部門：小学生から一般の方まで対象

<韓国旅行記>

- 日本語 韓国旅行記部門：小学生から一般の方まで対象
- 韓国語 韓国旅行記部門：小学生から一般の方まで対象

【応募規定】

<日本語エッセイ、韓国語エッセイ部門>

- ◇ テーマ（次の中から択一）
A「オリンピックと韓日交流」、B「私が感じた韓国」、C「私が考える両国の未来」

<日本語川柳・俳句、韓国語川柳・俳句部門>

- ◇ テーマ
自由（但し、日本語川柳・俳句部門の場合、韓国または韓国語に関するもの）

<日本語 韓国旅行記部門、韓国語 韓国旅行記部門>

- ◇ テーマ
韓国旅行（韓国旅行中に感じたことや思い出、エピソードなどを各部門の言葉で旅行記にして投稿）

【審査方法】

駐日韓国大使館 韓国文化院内で部門ごとに審査委員が集まり、審査会を開催

【審査員】

- ◇ 日本語エッセイ、日本語 韓国旅行記部門
呉英元（二松学舎大学名誉教授及び駐日韓国文化院 世宗学堂長）
桜井泉（朝日新聞記者）
- ◇ 韓国語エッセイ中高生・一般部門、韓国語 韓国旅行記部門
南潤珍（東京外国語大学准教授）
武井一（東京都立日比谷高等学校教員）
李允希（東京成徳大学教授）
- ◇ 日本語川柳・俳句、韓国語川柳・俳句部門
兼若逸之（元東京女子大学教授・駐日韓国文化院 世宗学堂運営委員）
曹喜澈（元東海大学教授・駐日韓国文化院 世宗学堂運営委員）





審査結果 (総応募作数：2,452 作)

日本語 韓国旅行記部門 (応募作数：94)

日本語エッセイ部門 (応募作数：226)

- ◇ 最優秀賞 (1 名)
 - 堀江風花 (奈良県立医科大学)
- ◇ 優秀賞 (2 名)
 - 増田みつ枝 (東京都)
 - 徐基賢 (東京韓国学校)
- ◇ 佳作 (4 名)
 - 竹淵龍桃 (熊本県)
 - 岡本莉奈 (創価大学)
 - 安田詩温 (立教大学)
 - 吉田碧衣 (筑紫女学園中学校)
- ◇ 入選 (12 名)
 - 櫻村日奈太 (東京都立大学)
 - 会田花来 (東京都立大学)
 - 妹尾純也 (大阪府)
 - 清水菜生 (北杜市立甲陵高等学校)
 - 工藤咲良 (神奈川県)
 - 角田裕実子 (大阪府)
 - 狩野彩花 (宮城県加美農業高等学校)
 - 久門美保 (愛媛県)
 - 安智雅 (千種高等学校)
 - 松島春奈 (長野県)
 - 前田貴之 (千葉県)
 - 光永茉弥 (明治大学)

- ◇ 最優秀賞 (1 名)
 - 矢田 岳 (高知県)
- ◇ 優秀賞 (2 名)
 - 山口凌 (熊本県立八代高等学校)
 - 藤原歩美 (岩手県)
- ◇ 佳作 (4 名)
 - 浅野秋生 (滋賀医科大学)
 - 池田優菜 (上智大学)
 - 倉次みのり (東京都)
 - 佐藤栞 (二松学舎大学)
- ◇ 入選 (12 名)
 - 中島萌果 (東洋英和女学院大学)
 - 見澤富子 (埼玉県)
 - 池野宗子 (東京都)
 - 鈴木望叶 (立教新座高等学校)
 - 森由花 (神奈川県)
 - 杉本翔生 (奈良県)
 - 塚野安枝 (宮崎県)
 - 梅里奈央 (神奈川県)
 - 平手亜紀世 (愛知県)
 - 藤野美保子 (神奈川県)
 - 林淳月 (大阪府)
 - 辻川智子 (神奈川県)

韓国語エッセイ 中高生部門 (応募作数：42)

- ◇ 最優秀賞 (1 名)
 - 澤路梨華 (長崎県立対馬高等学校)
- ◇ 優秀賞 (2 名)
 - 栗栖杏 (広島市立基町高等学校)
 - 岩田せり (済美高等学校)



- ◇ 佳作（4名）
- 赤林涼夏（愛知県立岩倉総合高等学校）
- 和泉こゆき（東京都立目黒高等学校）
- 五月女彩海（神奈川県立神奈川総合高等学校）
- 長谷純奈（滋賀県立国際情報高等学校）

- ◇ 入選（12名）
- 渡邊えみり（明治大学付属明治高等学校）
- 宮地姫菜（愛知県立岩倉総合高等学校）
- 石塚茉鈴（國學院大学久我山高等学校）
- 深井爽楽（長崎県立対馬高等学校）
- 宮原千遥（長崎県立対馬高等学校）
- 永野彩音（滋賀県立国際情報高等学校）
- 三品ジュゼル（愛知県立岩倉総合高等学校）
- 宗彩乃（岡山後楽館中学校）
- 山元なのは（京都府立洛北高等学校）
- 佐々木琴乃（仙台育英学園高等学校）
- 古賀月姫乃（愛知県私立聖霊高等学校）
- 齊藤笑（神田女学園高等学校）

韓国語エッセイ 一般部門 (応募作数：99)

- ◇ 最優秀賞（1名）
- 池邊新菜（帝塚山学院大学）
- ◇ 優秀賞（2名）
- 長谷川春奈（千葉県）
- 渡邊玲子（宮城県）
- ◇ 佳作（4名）
- 津村優希（神田外語学院）
- 吉澄美輝（帝塚山学院大学）
- 吉村幸（高知県）
- 岩堀日向子（昭和女子大学）
- ◇ 入選（12名）
- 鎌田慧海（愛知県）
- 國本優姫（北海商科大学）
- 文梨円花（北海商科大学）
- 氏江未凧（神田外語学院）
- 中島優（神奈川県）

- 土屋真奈（長野県）
- 田村美恵（高知県）
- 森田七星（大阪府）
- 松永泉（千葉県）
- 森友里奈（新潟大学）
- 森永愛生（大阪府）
- 山下ちひろ（創価大学）

韓国語 韓国旅行記部門 (応募作数：60)

- ◇ 最優秀賞（1名）
- 全彩香（東京都）
- ◇ 優秀賞（2名）
- 南圭子（千葉県）
- 川名木綿子（東京都）
- ◇ 佳作（4名）
- 宮久令子（神奈川県）
- 杉本翔生（奈良県）
- 福土陽子（東京都）
- 山極尊子（埼玉県）
- ◇ 入選（12名）
- 國枝梨花（北海商科大学）
- 武村葉子（東京都）
- 笠原瑞紀（新潟県立大学）
- 高島秋秀（윤병수）（東京都）
- 佐藤真奈美（神奈川県）
- 中野莉央（帝塚山学院大学）
- 山本佳奈（東海大学）
- 鈴木理麻（東京都）
- 椽木萌子（新潟県立大学）
- 西山優実（大阪府）
- 富谷日菜子（北星学園大学）
- 末永麻友（東京都）

日本語川柳・俳句部門 (応募作数：1,446)

- ◇ 最優秀賞 (1名)
 - 清水由加里 (大阪府)
- ◇ 優秀賞 (2名)
 - 苅谷菊子 (神奈川県)
 - 仲川暁実 (愛知県)
- ◇ 佳作 (4名)
 - 清田三四郎 (神奈川県)
 - 松木精司 (大阪府)
 - 相田香菜子 (神奈川県)
 - 金剛明夫 (埼玉県)
- ◇ 入選 (12名)
 - 佐藤礼司 (新潟大学)
 - 河越美妃 (八千代松陰高等学校)
 - 橋本江身子 (埼玉県)
 - 伊丸岡由美子 (青森県)
 - 渡辺誠二 (福岡県)
 - 井内雅仁 (大阪府)
 - 早川礎子 (千葉県)
 - 川島多香子 (東京都)
 - 趙惠元 (東京都)
 - 鈴木久美子 (神奈川県)
 - 村田睦美 (埼玉県)
 - 荒谷そのみ (甲陵高等学校)

韓国語川柳・俳句部門 (応募作数：485)

- ◇ 最優秀賞 (1名)
 - 大谷信子 (神奈川県)
- ◇ 優秀賞 (2名)
 - 横川実咲 (新潟大学)
 - 前田侑 (北星学園大学)
- ◇ 佳作 (4名)
 - 南圭子 (千葉県)
 - 渋谷祐熙 (青山学院大学)
 - 佐藤康予 (東京都)
 - 及川奈緒 (北星学園大学)

- ◇ 入選 (12名)
 - 後藤将司 (東京都)
 - 的場静花 (吉備国際大学)
 - 池田日向子 (新潟大学)
 - 平田大葵 (エムズ英会話)
 - 的野紀子 (福岡県)
 - 石井莉帆 (新潟大学)
 - 湯澤葉子 (東京都)
 - 新澤明子 (大阪府)
 - 田中優子 (長崎県)
 - 斉智司 (埼玉県)
 - 入谷厚子 (大阪府)
 - 国原綾子 (神奈川県)

賞

- ◇ 最優秀賞 (各部門1名、計7名)
賞状、副賞 (韓国への旅3泊4日をペアで)
- ◇ 優秀賞 (各部門2名、計14名)
賞状、副賞 (韓国への旅2泊3日)
- ◇ 佳作 (各部門4名、計28名)
賞状、副賞 (ブルトゥースイヤホン)
- ◇ 入選 (各部門12名、計84名)
賞状、『韓国語学習ジャーナル hana』1年購読権利



審査評

日本語エッセイ・旅行記部門 審査評 審査委員 呉英元〔二松学舎大学名誉教授〕

『韓日交流作文コンテスト 2020』 受賞に寄せて

受賞者の皆様、おめでとうございます。

今年も、とても楽しく、読ませてもらいました。作品毎の個性がそれぞれ出ており、甲乙付け難い作品ばかりだったと言うのが全体を通しての所感です。



エッセイ「ソウルオリンピックの時」では、「体の中から何か温かく溶けだしていき幸福感と解放感でいっぱいになった。…今ならどんな心の壁も国境ものり越えられそうな気がした。」には、オリンピック応援時のスタジアムでの臨場感と、作者の3年間の韓国での感動が凝縮した叫びを感じました。

エッセイ「2099年、夏の日」は、96歳になった未来から年代を遡りながら起きる事を予想していく発想が実にユニークです。16歳の作者の夢はアジアの平和と共存、是非そうなって欲しいものです。

旅行記「父ちゃんとふたり、韓国で過ごす週末」は、「紙おむつと着替えとレトルトの離乳食で満載のスーツケースを引き、抱っこ紐でくりつけた1歳半の息子と二人、仁川国際空港に到着した。」と言う様子から困難な週末を予想させます。でも、実のところ、韓国の人情の深さに触れ、親子共に忘れられない温かい週末を過ごす様子が手に取るように、しかも、軽妙なタッチで綴られています。そして、子供たちへの国境を越えた大人の気持ちとして、「ずらっと並んだおむつ交換台で、沢山の韓国の子どもたちに混じっておむつを替えていると、君たちでアジアの未来を作ってくれよ、そんな気持ちになってくる」と、未来への希望が身近な目線で眩かれています。

旅行記「北漢山の山の神」では、ちょっとした手違いで、一日暇になったソウルで、手近な北漢山に登る体験の話です。低山だけど意外と険しいので、山部出身の作者も苦労したようですが、頂上まじかでは、世話好きな韓国のおばさんに背中を押してもらい、おまけにお弁当まで分けてもらって、「まさか山神じゃあるまいし」と、胸をほんのり熱くしながら山頂からソウルを見渡す作者の様子が微笑ましく思えました。

日韓関係が難しい中、コロナ禍で世界が試練に晒されている今、平和への民間交流に根差した熱い心、共存のための小さな助け合い、未来への前向きな希望が作品群の随所にちりばまれ、読み終わった後、暖かい気持ちになりました。

これからも韓国と日本の言葉と文化を理解し合う良きパートナーとして、両国の親善と交流のために一緒に手を取り合って、進んで行きましょうね。

日本語エッセイ・旅行記部門 審査評 審査委員 桜井泉〔朝日新聞記者〕

コロナに負けずに

新型コロナウイルスの感染が広がり、韓国への旅は、夢のまた夢に。どのくらいの応募があるか心配しましたが、多くの作品が集まり、うれしく思います。



日本語エッセイ部門の最優秀賞は、奈良県立医大に学ぶ堀江風花さんの「私が考える両国の未来」。

高校生だった堀江さんは、米国に留学し、少し年上の韓国人の看護学生とルームメイトに。医学の道に進もうか、迷っていた堀江さんの背中を押したのが、「誰かの命を救いたいから看護師になるの」という彼女の言葉でした。

今春の再会の約束は、かないません。コロナとたたかう韓国の医療の現場で働く彼女からは、切迫した様子が伝わって来ます。「国籍や信仰を超えてたくさんの人を救いたい」。米国で誓い合った言葉がよみがえります。日本と韓国の若者が、励まし合い、成長してゆく姿は感動的です。迷わず、最優秀賞に推しました。

優秀賞は、増田みつ枝さんの「ソウルオリンピックの時」と徐基資さんの「2099年、夏の日」。増田さんは、1988年のソウルオリンピックの感動を思い出しながら書いてくださいました。あの頃、長期滞在の日本人は、あまり多くありませんでした。どんなきっかけで韓国に住むようになったのでしょうか。

徐さんは、東京の韓国学校で学んでいます。21世紀最後の年から日韓関係を振り返るというアイデアがユニークです。今、日韓関係は最悪ですが、新型コロナのワクチン開発で助け合い、40年には日本の協力で南北が統一されるなど、次第にいい関係に。60年に日韓海底トンネルができ、「東海」か「日本海」かでもめていた海も「和海」とすることに。両国の科学者が協力して、平均寿命は120歳になりました。「2020年の夏、私が苦しみながら夢みていたことがいつの間にか実現したようだ。両国の政治家にぜひ読んでもらいたいですね。

韓国旅行記部門の最優秀賞は、地方公務員の矢田岳さんの「父ちゃんとふたり、韓国で過ごす週末」。1歳半の息子を連れて仁川へ。韓国の人たちは子ども好き。食堂に入れば、寝入った息子のために座布団を敷いてくれ、カボチャのスープをつくってくれます。駅で、電車で、コンビニで、人々が気軽に子どもに声をかけてくれました。

おむつの交換台で、韓国の子どもたちに混じっておむつを替えました。「君たちでアジアの未来をつくって行ってくれよ」。この一言が、光ります。

優秀賞は、山口凌さんの「7年前のあの日」と藤原歩美さんの「母と初めての韓国旅行」です。能を演じる山口さんは、小学校3年のとき、江原道・春川での公演が初舞台でした。「能という文化で世界の人を笑顔にしたい」。熱い思いが伝わってきます。

藤原さんは、お母さんに航空券をプレゼントして夢の韓国旅行へ。仲のいい親子の様子がうかがわれます。早く、コロナ禍が終息し、また以前のように気軽に海を越えられるようになるといいですね。





審査評

韓国語エッセイ・旅行記部門

審査委員 李允希 [東京成徳大学教授]

人類が経験したことのない感染症の影響を受けて、日韓交流も厳しい状況に置かれています。この憂鬱を皆さまの作品が一気に解消してくださいました。

今回のコンテストの応募作品数は、大会を開催して以来2番目に多い数でした。驚きと興味を持って原稿を読んでいくうちに、私の憂鬱は希望へと変わっているのが実感でき、感動と感謝の気持ちでいっぱいになりました。

まずは、応募してくださったすべての皆様に感謝を申し上げたいと存じます。

審査をするうえで私が重視した点はエッセイらしい、心に伝わる表現です。この厳しい状況を共に生きる私たちの心のつながりを、豊かな感性で表現した作品を選ばせていただきました。そして、まだまだ知られていない韓国の美しさややさしさに気づかされた作品も高く評価させていただきました。

<韓国語エッセイ 中高生部門の最優秀賞>

韓国の人の行動の中には、一見お節介りと感じるものもあるかと思われませんが、実はそれが「情」であることを発見したことはたいへん素晴らしいことです。相手を知り理解しようとする努力の賜物だと思います。

<韓国語エッセイ 一般部門の最優秀賞>

「엇박자의 아름다운 조화 부산」というタイトルは、既に私の好奇心を掻き立てていました。読み始めは政治問題かと思えた作品でしたが、いつの間にか私をプサンサ투리의飛び交う美しい夜景の浜辺にいきなってくれました。海でつながる日韓が奏でる「すれ違いのリズム」が、実は絶妙な調和を作り出していることを気づかせてくれたのです。思わず浜辺の夜明けを想像しながら日韓の明るい未来への希望に胸騒がせてくれた素晴らしい作品でした。

<韓国語 韓国旅行記 最優秀賞>

旅行記というと旅の記録のような書き方になりがちですが、美しい景色の背景に隠れている辛い出来事が見事な表現で綴られた作品でした。済州島の歴史を知り、「悲しくも美しい済州島黄昏」を謙虚な心で臨まれる姿には頭が下がる思いが致しました。

どれも素晴らしい作品ばかりで、審査委員からは様々な意見も出され、順位を決めるのはたいへんな作業でした。私が素晴らしいと思う作品が選ばれなかったときは、正直ちょっと残念に思ったりもしましたが、日韓の人々の思いと心の繋がりを感じさせてくれた素晴らしい審査の時間でした。

受賞者の皆様、どうもおめでとうございました！



韓国語エッセイ・旅行記部門

審査委員 南潤珍 [東京外国語大学准教授]

昨年に引き続き韓国語のエッセイ部門(一般・中高生)と韓国旅行記部門の審査をさせていただきます。コロナ禍の厳しい状況にもかかわらず、出品数が去年とほぼ同じで、内容の幅が広がり、意欲的な作品が多く見られましたこと、大変嬉しく思います。

韓国語エッセイ部門のテーマは、「オリンピックと韓日交流」、「私が感じた韓国」、「私が考える両国の未来」でしたが、中高生部門、一般部門ともに「私が感じた韓国」に関する作品がもっとも多く、実体験の現実味や作者の人柄が垣間見える個性的な作品の数々だったと思います。韓国語でエッセイが書けるくらいの方々だと、韓国語学習歴だけでなく、様々な韓国体験や交流の経験の持ち主であることを実感しました。

こうした作品の中から入賞作を選ぶことは大変難しかったです。選考の過程で私がもっとも重点をおいたのは、与えられたテーマを自分の経験、伝えたいキーワードと上手く結びつけることでした。大きいテーマを紐とぎ、身近な話として語っている作品を選ぶようにしました。

中高生部門の最優秀賞に選ばれた作品は、韓国人の「凶情」をキーワードに自分の経験や考えをまとめ、まとまりのある文章に仕上げたと思いました。そして韓国在住の被爆者の実情やアイドル文化を自分の体験として述べた作品にも大変好感が持てました。

一般部門においては、作品を読んで微笑んだり涙ぐんだりする、幸せな体験をさせていただきました。プサンで味わった「不調和の調和」を日韓関係に照らし合わせて淡々と述べている今回の最優秀作は、内容面でも文章としての完結性の面でも優れており、躊躇なく最優秀作に選びました。韓国をめぐっての家族間の葛藤や韓国料理にまつわる思い出を描いた作品も複数あり、感動を受けました。

韓国旅行記部門は、単なる旅行日程を述べるのではなく、旅行を通じて感じたことや知ることになったこと、感じたことを綴った完成度の高い作品が多く、以前に比べて進化を実感しました。個人的には済州島旅行の体験と大阪のコリアタウンを繋げたり、ソウルの街中で出会った「詩文化」を紹介した作品が印象的でしたが、最優秀賞作をはじめ、入賞作の多くは「ここが良かった」だけでなく、「ここで～をして、自分はこう思った」「この経験がそれからの自分にこうした影響を与えた」と自分だけの話を述べております。そして韓国語の文章としての表現力も優れており、名実ともに「作品」となっています。

以上、審査評というより感じるままを記しておきました。これからも皆さまの韓国語力、ましては韓国力がもっと深くなっていくことを期待します。

ありがとうございます。





審査評

韓国語エッセイ・旅行記部門

審査委員 武井一〔東京都立日比谷高等学校教員〕

入賞された方、おめでとうございます。残念ながら入賞できなかった方の作品も印象深いものばかりでした。中高生の純粋さ、大学生の社会への思い、社会人の経験の深さ、社会を卒業した方の味わい。どれもが作者の思いが伝わってくるものでした。



なかでも、ご自身の経験から発見したこと、考えたことが読みとれるものに好感をもちました。たとえば、たまたま写真を撮りに訪ねた町で、地元の人に声をかけられてよりよい撮影スポットに連れて行ってもらったという作品がありました。作者は、その人から、その場所の思いもしない歴史的背景を聞かせてもらい、いろいろ考えさせられたそうです。何気ない出会いが自分の世界を広げてくれたことがよく現れていました。また、桜の風景を扱った作品がありましたが、まるで実際の風景が目に見えよくなるようなものでした。

私自身の視野を広げた作品も多々ありました。例えば、韓国の詩を扱った作品がそれです。韓国では詩が盛んなのですが、これほど多くの場所に詩が書かれていること、そのことをどう考えたら良いかは、この作品から教えてもらいました。

入賞した作品には共通する点があるように思います。本人の体験したことをベースにテーマを展開していると言うことです。日記のように体験したことを羅列しているだけではありません。そこから何を思ったか、何を感じたかと言うことを一本の糸で紡ぎ出しているのです。論理が飛躍しないということかもしれません。たとえば、前後の脈絡なく突然「韓国人の情を強く感じた」でまとめる作品をときおり見かけました。経験に関連づけて、その情がどういふもので、それをどういふ場面で感じたか、そして日本と何が違うのかまで触れると良かったと思います。実は、来日した韓国の人も日本人に親切さを感じるようなからです。おそらく、互いに自分に無い何かを感じているのでしょう。すばらしい経験が書かれている作品が多いだけにもっといふ思ったものです。

最後に気づいたことを2つ書きたいと思います。1つは日韓関係への言及です。ここ数年日韓関係は必ずしも良好とはいえない状態が続いています。そのことに触れている作品も多くありました。ただ、このことを枕にすると、話が大きくなりすぎて、本当に書きたいことが十分に書けないように感じました。2つ目は用語です。「最近」、「男性」などを“최근”、“남성”とする作品を多く見かけました。しかしどちらも韓国ではあまり使わない用語です。できれば、日韓辞典などを調べるだけでなく、ネイティブにも見てもらうとよいように思います。

次回もより高みを目指して挑戦していただけると嬉しく思います。

川柳・俳句部門

審査委員 兼若逸之〔元東京女子大学教授〕

今年も多くの応募作に出会いました。コロナ禍の影響が微妙な影を残しているのではないかと心配もありましたが、生き生きとした句や韓国の文化を背景にした句に会う度に言葉の持つ不思議な力に喜びを感じました。作品の一つ一つに現在どのように生きているのか、どのように感じているのか、何が自分を感動させたのか、こうした生き方の原点とも言えるものをいろいろな表現方法を用いて伝えたいという意気込みを読み取ることができました。



入選句の橋本さんの「亡き父はマイク握ればオッチョンジー」の「オッチョンジー」は1960年代の懐メロのトップ、「黄色いシャツを着た男」の歌詞の一部です。この歌を十八番にしていた父親への愛のこもった句となっていて、ご自分でも歌っていらっしやるような気がします。伊丸岡さんの「夕立の情緒教えたソナギかな」の『ソナギ』は短編小説のタイトルで、病弱な都会の女の子と田舎の少年との淡い恋ともいえる心の交流を描いています。『猟奇的彼女』という映画にもパロディ化されて描かれていました。同名の歌もあるようです。荒谷さんの「勇気出しオッパと呼んでもいいですか?」は今後の展開が気になります。優秀作の「ハングルをがんばる私に老いは無し」と言い切った75歳の刈谷さんには頭が下がります。また仲川さんの「帰国後に木箸が軽く感じられ」は韓国でなれたチョッカラクやスッカラクの重みがまだ手に残っている様子を句にしています。

最優秀作に選ばれた清水さんの「会えずとも想いを手話でサ・ラ・ン・ヘ・ヨ」では手話を教わった様子が思い浮かびます。おそらく指文字ではないでしょう。日本語では「愛している」という手話は手の甲の上を手のひらで擦るような感じで回すようですが、韓国語では「サラン」はこぶしの上を手のひらで撫でるように回します。お年を召した方なら『名もなく貧しく美しく』という映画の小林桂樹と高峰秀子の電車の中での感動的な手話の場面を思い出す方も多いでしょう。コロナ禍で会えなくなったことに不平や不満をぶつけるわけではなく、互いに想いあうことの大切さをしっかり教えてくれる句です。今回応募された句にも多くの想いが詰まっていました。

「なぜこの句が選ばれたのだろう」、「私の句の方がいいのに」と思われた方も多いのではないのでしょうか。それぞれの句の受け取り方は読み手によっても、また社会の状況や立場によってもずいぶん変わるものです。今回選ばれなかったからといって、落胆することはありません。日々の生活の中で感じたことを5・7・5のリズムに乗せて文字にしてみましょう。そしてさらにもう一工夫してみてください。来年の応募、お待ちしております。





審査評

川柳・俳句部門

審査委員 曹喜澈 [元東海大学教授]

「韓日交流 作文コンテスト」に「川柳・俳句部門」ができて今年で4年目。ますます多くの作品が寄せられ、作品のレベルも上がっているような気がします。特に韓国語川柳・俳句部門では、485首が集まりました。テーマも極めて多様で、そこに出ている食べ物の種類だけでも数十種類です。



간장게장, 감자탕, 계란찜, 곰탕, 꽃감, 국밥, 김밥, 김치, 김치볶음밥, 노가리, 달고나커피, 닭발, 떡볶이, 무등산수박, 물김치, 미역국, 부대찌개, 부침개, 불고기, 봉어빵, 비빔밥, 삼겹살, 삼계탕, 설렁탕, 순두부찌개, 식혜, 양념치킨, 어묵, 오이김치, 인삼, 짜파구리, 청국장, 치맥, 파전, 한정식, 해물전, 호떡…

中には、ここ1、2年間で話題になっている 달고나커피, 짜파구리まで見かけられます。

他に、고진감래주 (苦尽甘来酒: ビールと焼酎、コーラ入りの爆弾主)、맛집 (おいしいお店)、입덕 (オタクの世界に足を踏み入れる #오덕후 (オドック: オタクのこと) と입문 (入門) を組み合わせた言葉)、혼밥 (혼자 밥을 먹다 (一人でご飯を食べる) の略語) などもありました。

さらに、今年のコロナ禍にまつわる「感染者」の意味の「확진자 (確診者)」にかけた「확전자 (急に太った人)」まで登場しました。

こういった単語を拾い読みしてみると、改めて皆さんの韓国との交流と理解が進んでいることがわかるような気がします。

さて、ハングル川柳・俳句の試みは歴史が浅く、個人的に興味でやってきたことはあっても、こういった形で公に募集してきたのはなかったと思います。

ということで、応募者にしても審査する者にしても試行錯誤を重ねていくしかないかも知れません。

まず、規定の音数の5・7・5は韓国語のリズムとしてもあまり違和感がないので、守ってほしいと思います。もちろん場合によっては「字余り」や「字足らず」も認めざるを得ませんが、いろんな言い回しができるところで、字数を守らないのはあまり勧めることはできません。

例えば「엄마의 잔소리 (母の小言)」は「엄마 잔소리」、「사랑을 전하는 (愛を伝える)」は「많은 사랑 전하는」といった具合に助詞を省いたり、副詞を付け加えたりする方法もあるでしょう。他にも、

「멈추지 않는다」下6 → 「멈추지 않아」下5

「갈 수 있다」下4 → 「갈 수 있겠지」下5

「봄이 왔다」下4 → 「따뜻한 봄이」下5

などからも、ちょっと言い回しを変えることで、字数もそろい、もっと詩的な表現に早変わりするかと思います。

ハングルで川柳・俳句を書くということは大変かと思いますが、これからも「1日1句」のつもりで、書き続けてほしいと思います。





最優秀賞

私が考える両国の未来

堀江風花〔奈良県立医科大学〕

「いつか国籍や信仰なんて飛び越えて沢山の人の命を救おうね」。私たちはそう約束して、再会を誓った。この春、私は韓国旅行を予定していた。大好きな彼女に会うためにだ。でも、その願いは叶わなかった。彼女と初めて会ったのは4年前、アメリカに留学した時のことだ。彼女はステイ先のルームメイトだった。少し天然で、でも真面目で、優しい韓国人のお姉さんだった。仲良くなれなかったらどうしよう、トラブルになったりしないかな、とずっと不安だったが、同じアジア圏だからか、彼女の人柄のおかげか、その日のうちに仲良くなった。

その当時彼女は看護学生、私は高校生だった。医学部に行きたいと漠然と思っていたが、本当に医師になりたいのか、私に人の命を救えるのか、どう生きたいのか、ただ自分がわからなくなっていた。でも、英語はもちろん、看護師になるために夜遅くまで医学の勉強も頑張る彼女の姿を見て、「彼女のようにになりたい」と思った。ある時彼女に聞いたことがある。私は医師になれるかな？すると彼女はこう答えた。「なれるかなれないかじゃなくて、なりたいかどうかだよ。私は誰かの命を救いたいから看護師になるの。」その言葉があったから、もう迷わなかった。私は医師に「なりたい」。帰国後、一生懸命勉強した。彼女に恥ずかしくない自分でありたいと思い、諦めなかった。

あれから4年。彼女は看護師になり、私は無事医学部に入学して医師になるための勉強をしている。この4年間、彼女が日本に来てくれたり、私が韓国に遊びに行ったりした。時を経るごとにカッコよくなる彼女を見て、私も負けてられないと自分を鼓舞した。何年経っても彼女は私の道標だ。追いつきたくてずっと憧れ続けている、そんな存在だ。この春、彼女との再会の約束をした。でも平穏な日々は知らぬ間に一変した。2020年、医療従事者にとって大変な一年となった。治療法がわからない。感染が止まらない。コロナウイルスは今もお猛威を奮い続けている。さすがの彼女も"too tough"と送ってくる程、医療の現場は切迫しているようだ。それでも彼女は今日も闘い続けている、1人でも多くの命を救うために。

ねぇ、覚えてる？あの日、アメリカで語り合ったよね。「国籍や信仰を超えて、たくさんの人を救いたい。」あの時は高校生だったけれど、キラキラした目で語るあなたを見たから、辛い厳しい受験を乗り越えて私はここまで来れたんだ。コロナが収束するのはいつだろう。私たちが次に会えるのはいつだろう。全然、先が見えなくて不安もたくさん募るけれど、いつか私たちが再会できるその日まで彼女は今日も誰かの大切な人を救い続けているだろう。だから私は大好きな彼女の大切な人を守りたい。あの日、私が助けられた様に、私も誰かを助けたい。私が医師になるには、まだ時間はかかるけれど、日本と韓国の架け橋になれる医師になりたい。そんな日が来ると、私は未来の私達を信じている。

優秀賞

ソウルオリンピックの時

増田みつ枝〔東京都〕

今朝も川面はコリアンブルーの空を映して、キラキラと輝いている。ソウル市内を流れる漢江を見下ろす、ここはリバーサイドトレッジと呼ばれる外国人専用アパートである。この国に来て3年の月日が流れていた。1988年10月2日の朝である。

漢江の南にあるスタジアムでは9月17日にオリンピックの開会式が行われ、世界の選手達が競技を繰り広げてきた。史上最多150か国以上の国を迎え、漢江の奇跡といわれる経済成長と民主化の嵐を経て成し遂げたソウルオリンピック。韓国選手の活躍も目覚ましく、国中が熱狂していた。

日本選手は今ひとつ振るわないが、ここに住む日本人たちは日の丸を振っての応援も控え、静観している。とは言っても水泳の鈴木大地選手が話題のバサロで金メダル、日の丸が真ん中に挙がった会場で私は胸が詰まった。この3年あまり、激動の韓国で自分自身を問い続ける毎日だった。タクシーの運転手に民族とか愛国心とか言われても、今まで考えたこともなかったし、語る言葉も持っていなかった。一体自分が何者か、歯がゆいばかりだった。とにかく韓国語を学んで、自由に語り暮らしたいと切実に思った。少しずつ韓国語が話せるようになると緊張感も解け、目の前の世界が広がる喜び、楽しさに夢中になった。そしてこの国の友人達の率直でだらかな温かさに出会い、自分の意外な適応力や柔軟性に気づいて自信も持てるようになった。

さあ、いよいよ午後から開会式である。世界中からマスコミも大挙して訪れ、街の人口は膨れ上がっていた。地下鉄でオリンピックスタジアムに向かう。入り口で日本から取材に来た女性と落ち合い、メインスタジアムに入る。「韓国の人ってぶつつかっても謝らないんですね」と彼女が言う。「それね、無礼というより皆迷惑かけあって暮らすのが当たり前だと思っているから、いちいち謝らないんです」と説明すると目を丸くしていた。

ゲートを抜け階段を上るとすでに10万人の観客で埋め尽くされたスタンドは地鳴りのようなどよめきに包まれていた。席に着くとまもなく日が暮れ、渡されたペンライトを揺らしていると、一段と大きな歓声が沸き、選手が群衆となってなだれ込んできた。整然とした開会式と打って変わり、思い思いに肩を組み、手をつなぎ、写真を取り合い、誰もが緊張から解き放たれたはじける笑顔である。しばらく哑然と眺めているうち、私もじっとしていられなくなった。衝動的に立ち上がりスタジアムの外に出ると、そこは思いがけず大勢の人で溢れていた。みんなが笑顔で歓喜を交わす人種のるつぼである。踊り歌う民族衣装の輪に加わり手をつないだ。もみくちゃにされながら、肌の色も人種もこんなに色々な人間がいることに感動していた。

体の中から、何かが温かく溶けだしていく幸福感と解放感でいっぱいになった。近くて似ている韓日である。今ならどんな心の壁も国境も、のり越えられそうな気がした。

優秀賞

2099年、夏の日

徐基賓〔東京韓国学校〕

2099年、夏の日、東京の景色は幼い頃からあんまり変わってないような気がする。しかし、不思議なほど変わってしまったものがある。

今年96歳の私は2003年、東京で生まれた韓国人だ。この年、韓国ドラマ「冬のソナタ」が日本に上陸した。日本人は忘れていた何かを思い出し、韓国人は日本人と共感する何かを発見したらしい。

東京韓国学校に通っていた私は、両国語のバイリンガルになった。幼い時から韓国文化と日本文化を同時に楽しめてきたことは、今でも幸運だったと思う。

2020年、その年の夏も今年のように暑かった。新型コロナウイルス感染症が蔓延して、夏にもマスクを外せない異常な夏となった。また、韓国と日本の関係が最悪の年でもあった。ニュースには徴用工問題が毎日のように騒がれていた。両国が大好きな私には苦しい夏だった。その中、海外の自国民を疎開する時、両国が協力して相手国の人を助けたとの話からは希望を感じていた。その後の数年間、予防接種のワクチンが開発されたが、ウイルスの進化はもっと素早く、変種が出来た。日本の状況が苦しくなり、韓国が日本を助けた。今度は日本が韓国を助けた。この数年間の助け合いが続き、両国には戦争の記憶や、植民地の記憶を乗り越え、和解を話す人々が急増した。

そして2040年、日本の積極的な協力の上、韓国は北朝鮮と統一した。数十年間を続けてきた両国の交流おまつりが32年目を迎えた年のことだ。

2050年には、韓国と日本を繋ぐ海底トンネルの工事が始まった。反対する人々が工事を妨害したり、四谷の韓国文化院の前でデモを行ったりした。

2060年、海底トンネルが開通した。歌手BTS（防弾少年団）が開通記念曲を披露した。彼らは白髪になったり禿げたりしていた。「和と海トンネル」と名付けられたが、長い間「韓国東海」か「日本海」か、論争が絶えなかったこの海の名前も「和と海」（わかい、ファへ、和解の海）と決まったからだ。

今やこのトンネルは両国の交流と和解、平和と繁栄の象徴となった。「J-KTX」と呼ばれている新型新幹線が走り、東京駅とソウル駅を60分で繋いでくれる。人が盛んに往來することによって、韓国語と日本語は両国で通じる言葉になった。

2080年、日本と韓国と中国は「東アジアユニオン」になった。パスポートやビザが要らなくなり、お金の単位も共通の「サークル」に変わった。ヨーロッパの人々は100年前からやっていることなので、特別に目新しいことではない。私もこのトンネルを使って韓国に住んでいる友達や親戚に会いに行き、タピオカ・ミルク・ティーを楽しむ。そろそろ22世紀を迎える今、日本や韓国の平均寿命は120歳となった。韓国と日本の科学者たちが協力しあって遺伝子治療技術を開発した結果だ。

私も100歳になったら両国を行き来しながら暮らしたい。当然ながら健康保険もどちらでも使えるようになったので、どっちにいても安心だ。2020年の夏、私が苦しみながら夢見ていた事がいつの間にか実現したようだ。

佳作

第二の故郷、韓国

竹淵龍桃〔熊本県〕

休今から50数年前、はっきりした年月も思い出せない遠い昔、1960年代の韓国金浦空港に私は一人降り立った。言葉も地理も分からず、怖いもの知らずの20代の私は、住所の書かれた小さな紙切れ一枚を手に、戒厳令下のソウルの街を目指したのである。

ソウル市内のホテルに一泊した私は、翌日タクシーで千戸洞に向かった。細い路地のぬかるんだ小道に足を踏み入れると、途方に暮れる私の前に、派手なワンピース姿の小柄な中年女性がニッコリ笑って立っていた。その人が「菊子（クンジャ）さん」だった。写真で見えていたので、一目で分かった。「よく来た、よく来た」と日本語で迎えてくれた彼女の一言で私の不安と緊張は一気に解消、ほっと胸をなでおろしたあの日のことが昨日のこのように甦る。

彼女は、早速、私をレンガ造りの平屋の自宅に迎え入れ、疲れを癒すよう促した。周りから聞こえるハングルが確かに韓国に来たのだと実感させてくれる。オンドルの優しい温もりに包まれて、私は下町の喧騒の中でいつの間にか深い眠りについた。

当時、韓国語を学んでいた私は、仲間の紹介で菊子さんの長女とペンパルになった。長男は徴兵されて留守だったため、未亡人の菊子さんは梨花大生の長女と高校生の次男、中学生の次女と4人で暮らしていた。貧しいながらも、和気あいあいと一切れの魚をみんなで突っついて食べた住時が偲ばれる。その後、長女は日本に留学し、我が家にも遊びに来てくれた。爾来、私は40回近く韓国に足を運び、菊子さん一家を訪ね、家族ぐるみの親交を深めてきた。ソウル近郊の山や海にキンパップを持って、よくピクニックに出かけたものだ。時には、千戸洞大橋を歩いて漢江を渡り、1968年にオープンしたばかりのウォーカーヒルに連れて行ってもらったこともある。そこが外国人専用のカジノだとも知らずにトイレだけを借りたことも、今となっては懐かしい思い出だ。こうして彼らは私の愛する家族になっていった。

あれから半世紀、彼女の子供たちはみな独立して、家庭を持ち幸せに暮らしている。女一人で4人の子供を立派に育てあげた彼女は90歳を前に、長女の家族を頼りに米国に移住することになった。その知らせを聞いた私はどうしても別れの挨拶がしたくて、ソウル行き決意した。自身が肺がんであることを伝えるためだ。最後の別れになるかもしれないと二人は何度も抱き合い別れを惜しんだ。

思えば、初めて韓国を訪れて半世紀、何気なく始めた韓国語だったが、韓国はいつしか愛する家族の住む第2の故郷になった。反日感情が依然くすぶる日韓関係を思えば、今まで育んできた友情をそのまま葬らせたくない思いは強い。どんな時も家族として私を歓迎してくれた彼らの優しさ、熱き想いが私を幾度となく救ってくれた。そんな韓国の人々とのかけがえのない友情のバトンを若い世代に繋いでいきたい、それが今の私の願いである。

佳作

私が感じた韓国

岡本莉奈〔創価大学〕

私は小学2年生の時、大阪府の公立小学校に転校しました。それがきっかけで私は韓国が大好きになりました。

小学2年生という世界の国々の場所をまだ学んでいないため、韓国と聞いてもピンときません。そんな中で、朝のあいさつでは必ず「おはようございます。アンニョンハセヨ。グッドモーニング。」と言っている友達や先生。ある先生にだけ「ソンセンニム！」と声をかけている友達や先生を見て、茫然としているだけでした。私の転校した学校は日本以外の国にルーツがある児童が多いため、そのルーツのある児童の国の言語でも挨拶をしていました。6年生の頃には日本語、韓国語、英語に加えて中国語、フィリピン語で挨拶をするようになりました。

私が韓国という国のことを始めて知ったのは図工科の授業でした。もともと折り紙が好きだった私は「今日はチマチョゴリとパデチョゴリを折り紙で作しましょう。」と言われ、わくわくしていました。もう10年も前のことなので鮮明には覚えていませんが、そのあと、みんなからソンセンニムと言われている先生がチマチョゴリを着て授業してくれて、その美しさに見とれただけは覚えています。それから韓国という国に興味を持ち、自分から知ろうとするようになりました。毎週金曜日の6時間目に韓国にルーツのある友達が学ぶ民族学級というところへ、私は韓国にルーツはありませんが卒業するまで見学に行っていました。

それから卒業するまでの5年間、調理実習ではオイキムチとムキムチを作ったり、民族学級ではソゴやチャンゴ、両面太鼓を楽しんだり、毎年開かれるアンニョンフェスタという祭りで韓国の食べ物を食べたり、ハングルかるた大会をしたりして生活しました。

私はこうして韓国とともに5年間の小学校生活を終え、感じた韓国はたくさんあります。大好きな韓国にルーツがある友達や先生、チヂミやキムチ、トッポギ、韓国ドラマやK-POP…これらは今でも変わらず密接に感じながら生きています。今では韓国なしの生活は考えることができません。たとえ国同士の関係が変わっても、私と韓国の関係は変わることはありません。毎日キムチを食べて、韓国ドラマを見て、韓国にルーツがある友達と変わらぬ友情で生きていくことでしょう。こんなにも韓国を大好きにさせてくれたのは、小学校で出会ったソンセンニムや韓国にルーツがある友達です。

私は小学校教師を目指しています。教師になったら、私が感じた韓国のよさを伝えていきたいです。そして私が文化に触れながら韓国を大好きになったように、韓国をはじめ様々な国の文化に、子どもたちが触れるきっかけを作りたいです。このような目標をくれた私と韓国の出合いに感謝しています。

佳作

私が感じた韓国

安田詩温 [立教大学]

私のような悩みを抱えている若者はどのくらいいるだろうか。純粋な韓国人の母親と日本で生まれ育った韓国人の父との間で生まれた私は、もちろん韓国人だ。家族間では韓国語を話し、夕飯には母が作るキムチチゲやチヂミ、チャプチェなどの御馳走を毎日頬張っている。

しかしながら、生まれ育った国は日本であるため、母語とするのは日本語であり、日本文化の方が馴染み深いと言う点は間違いない。しかも、私は5歳の時に、これから日本で住んでゆくにあたって日本国籍を有するほうが障壁が少ないだろうと言う理由から、日本国籍を取得した。幼い頃に乳をせがむ私は「ウユ、ウユ（牛乳）」と韓国語なのか、日本語なのかの分別も知らずに、街中で泣き叫んでいたそう。そんな私が自分の持つアイデンティティーに何か違和感を感じたのは小学生高学年くらいになった時であった。私の家庭と友達の家は違う。そう強く感じたが、それがなんなのか当時の私には詳しくは分からなかったためにモヤモヤに見舞われたのを覚えている。

さらに中学生になると、母が学校訪問の際に私に韓国語で話しかけてくるのが、とても嫌になった。この件をめぐり私と母は後日激しい口論をしたことを覚えている。中学生だった私は、親しい友達に異質な目（自分が勝手に思い込んでいたかもしれない）で見られるのがただ単に嫌だったのだ。しかしながら、大学生になった今、その過去を振り返ってみれば、その根本的原因には日々悪化し毎日ニュースに取り上げられていた韓日問題があったに違いないと確信している。ニュースをつければ必ずと言って良いほど毎回韓日問題が取り上げられ、本を買いに書店へ行けば反韓を助長するヘイト本などがずらりと並んでいた。スマホでみた韓国関連記事のコメント欄には、心が痛くなるような反韓コメントが多く書き込まれていた。少しでも韓国を擁護するようであれば、ネット上の右翼たちが総叩きにしてしまう悲惨な現実。あらゆる場所に散りばめられた「NO 韓国」の思想は、意識せずとも私の元へ届き、それによって自らのアイデンティティーを深く傷つけられていたのだ。

韓国人である私が韓国人であることを宣言するのに、なぜ後ろめたさを感じなくてはならないのか。韓国人の母と韓国語で話すと言う当然のことをしているだけなのに、なぜもどかしさを感じなくてはいけないのか。私が願うのは韓日両国の真の和解である。私だけでなく、在日コリアンの皆や韓国人留学生、韓国からの旅行者、K-POP や韓国ドラマなどの韓国文化が大好きな日本人、これらみんなが胸を張って I love Korea と言える社会が訪れることを心から願っている。

佳作

私が感じた韓国

吉田碧衣〔筑紫女学園中学校〕

私には韓国出身のお友達がいます。

彼女は活発で好奇心が強く、いつもはじけるような笑顔にあふれています。

一番心に残っているのが、インターナショナルスクールのお祭りに行った時のことです。

フェイスペイントや外国語のおもちゃや本が並ぶバザー。色々な国の料理が美味しそうに並ぶ中で、どんな味が想像がつかない私の前で彼女はどんどん料理を頼んでいきます。持ち切れないくらいの料理を抱えて、楽しく一緒に食べました。

学校でも、ものおじせず授業に参加しているけれど、英語や韓国語を使って積極的に楽しむ姿にとても驚きました。

私にはない世界の広さを実感して、彼女はしっかりと根を張って生きている。

彼女から見た日本の生活は、毎日が新しく不思議な事の連続だったと思います。

運動会や音楽会などの様々な行事に給食。苦手なものもあったかもしれない。

それでも、いつも笑顔で色々なことに挑戦している姿をみていると、こちらも笑顔になっていく。

そんなとき、私は当たり前のように一緒にいて毎日を過ごしていたけれど、彼女を通して韓国という国の文化や人との接し方、温かさを感じていることに気が付きました。

私にとって彼女は韓国への窓だったのです。

そのことに気がついた今、今度は私が彼女からみた日本の窓になれるように、日本の良いところや文化、そして知って欲しいことを正しく伝えられるように、自分の国のことをもっと学ばなければならないと思いました。

手のひらをめいっぱい広げて太陽に向けた時、手首の角度を少し変えただけで違う景色がみえてくる。

空の色、雲の形、太陽の眩しさ、全部見えていたはずなのに、なぜか新鮮に感じてくる。

生まれた国は違っていても、中身は同じ人間で、世界の広さと英語というツールがあれば繋がる強さを教えてくれた友人に感謝しています。

いつか韓国で、自分の目で彩り豊かな世界を肌で感じてみたいと思っています。

最優秀賞

父ちゃんとふたり、韓国で過ごす週末

矢田 岳〔高知県〕

昨年8月の晴れた日、紙おむつと着替えとレトルトの離乳食で満載のスーツケースを引き、抱っこ紐でくくりつけた1歳半の息子と二人、仁川国際空港に到着した。

外で遊ぶには暑いけど、家の中で過ごすのも近所のショッピングモールも飽きた。そう思って飛行機の値段を見てみると仁川行きが意外に安く、早速週末に息子と二人で行くことにしたのだった。妻は家で寝てたいらしい。

なんの予定もないけれど、ホテルだけは空港の隣、雲西駅前に予約していたのでとりあえずチェックイン。息子は部屋にある洗濯機のダイヤルを回したり、受話器を取ったり戻したりする遊びに熱中していた。

スーパーで買い物のあと、晩ご飯をどうしようかとまだ暑い夕方の駅前を歩いていると、息子は抱っこひもに揺られてすっかり寝てしまった。

韓国らしくて、子供も食べられるものがありそうな店がいいなあ、と

店先の写真を見比べて、スンドゥップ屋さんに入る。すると寝ている息子を見かけた店員のおばちゃんが、頼みもしないのに小上がりの席に座布団を敷いてくれた。ここで寝かせなさいと言っているようだ。

息子が起きないよう慎重に座布団に寝かせてから、メニューの写真をじっくり観察し、スンドゥップと豆乳春雨の2品を注文した。すると次々おかずが運ばれてくる。キムチ、ナムル、焼き魚…ああそういえば韓国ってそうだった。息子の分はこれだけでもう十分すぎるくらいだ。

ご飯が来たので息子を起こそうとすると、またおばちゃんが来て、ダメダメまだ寝かしておいて、あんたが先に食べてなさいと言っているようだ。言葉は分からないけれど何を言われているかは、不思議と分かる。

言われた通り黙々とスンドゥップを食べていると息子の目が覚めた。さっそく春雨をあげようとする、またまたおばちゃんが登場して、안돼 안돼! と短くはさみで切ってくれる。最早されるがまま。

食べさせながら厨房を覗くと、おばちゃんが何やらかぼちゃをミキサーにかけている。ついにメニューにないかぼちゃスープまでサービスで出してくれた。息子も美味かったようでたくさん飲んだ。子供連れに優しいお店は日本にもあるけれど、ここまで濃密なサービスを受けたのは初めてだった。감사합니다を連発して、驚きと満腹のお腹を抱えてホテルに帰った。

翌日は金浦空港駅のショッピングモールへ。息子を連れて行くと、駅で、電車で、コンビニで、あらゆるところでいろんな人に話しかけられる。

안녕~? 아빠가 좋아요?

最近バイバイが出来るようになった息子も手を振って応える。人との距離感がすごく近い。

買い物して、モールにある遊具で遊んだあと、ずらっと並んだおむつ交換台で、沢山の韓国の子どもたちに混じっておむつを替えていると、君たちでアジアの未来を作っていくくれよ、そんな気持ちになってくる。

したことは普段と変わらないけれど、韓国でしか過ごせない週末だった。

優秀賞

7年前のあの日

山口凌〔熊本県立八代高等学校〕

鼓を打つ音が鳴り、能管の音が響く。そこに地謡の声が調和する。途端に人々を幽玄の世界へと誘う。しかし、そこは能楽堂ではない。そもそも日本でもない。そこは韓国。私の初舞台の地だ。

2013年の夏。私は韓日友好記念・文化芸術交流に能の演者として出演した。この出演が決まった時、当時小学3年生の私は驚きと嬉しさに小躍りした。

「おお、ついに初舞台か。しかも初海外。」

出発の日が近づくとつれ、やる気に満ち溢れていた。

公演の地は韓国・春川。軍事境界線まで30キロ程ということもあり、多くの軍事車両とすれ違った。まだ休戦中だ。

「能という文化で世界の人を笑顔にしたい。」

そう思っていた私は、思わず言葉を失っていた。心にわだかまりを抱きつつも、私は初舞台を踏んだ。人生で初めてスポットライトを浴びた。舞台から見た観客席は、日本文化に興味津々な多くの澄んだ瞳が埋め尽くしていた。今朝、バスから見た景色がまるで嘘だったかのように。公演時間はあっという間に過ぎていった。一つ一つの動作を美しくできるように心掛けた。

「自分の舞でだれかが幸せになってほしい」

その一心だった。私たち日本側の公演が終わり、今度は韓国側の公演が始まった。

「江原太平舞」

韓国で歴史のある舞踊である。日本の舞とは違い、複数の演者が同時に舞う。衣装も能とは違い、とても華やかなものとなっていた。そこにいた日本人は皆がその美しさに見とれていた。両国の公演が終わると、互いに固い握手を交わした。文化と文化の対話。なんと平和で素晴らしいことなのだろうか。私が一番夢見ていたものである。それが自分も含めて実現できている。これまでで最も幸せな瞬間だった。そして確信した。

「世界をつなぐことが自分の役目だ」と。

私はその後、2回韓国を訪れた。そのうち1回は、日韓国交正常化50周年記念における能の公演だった。

そして今年も「世界をつなぐ」公演をするはずだった。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大により、全公演が中止になってしまった。人々のつながりが希薄になる中、7年前を思い出しながら稽古を行う。いずれ来る公演のために。「世界をつなぐ」その日が来るまで。

優秀賞

母と初めての韓国旅行

藤原歩美〔岩手県〕

韓国旅行は今まで何度も行きました。ですが、今年の2月の韓国旅行は特別でした。23歳になり、初めて韓流ドラマが大好きな母と2人で韓国旅行に行きました。大学を卒業し働いたお給料で、母へ韓国行きの航空券をプレゼントしました。母はずっと韓国旅行に行きたいと言っていたので、私にとって母を韓国旅行へ連れていくことは、目標であり、一つの夢でした。なので、一緒に韓国へ行くことができるとても嬉しかったです。

母はドラマでしか見たことのない本当の韓国を目の前にし、いろいろなことに驚いていました。一つの料理を頼むと、キムチやいろいろなおかずがサービスでテーブルいっぱいに出てくること、マッコリを本当にやかんで飲むこと、すべてがとても新鮮だったそうです。私達は、ソウルと水原に行きました。水原に行ったのは、私も母も初めてでした。水原の華城は本当に感動しました。いつも韓国の歴史のドラマで見ているような景色が広がっていたからです。2月だったので気温は高くありませんでしたが、その日はとても晴れていて、青く広がる空に、たまにふく冷たい風が気持ちよかったです。

ソウルでは、夜に雨が降っていました。雨宿りをするためにたまたま入ったお店で、店長の方がとても親切にしてくれました。韓国では、チヂミを焼く音が雨の音に似ていることから、雨の日にチヂミを食べる習慣のようなものがあると教えてくれました。そして、サービスでチヂミをくれました。あの味は今でも忘れられません。本当にとっても美味しかったです。もっといろいろなことを話したり、感謝の気持ちを伝えたいのですが、私も母も韓国語が話せない状態だったので、何度も「カムサムムニダ」と伝えることしかできませんでした。それがきっかけとなり、今は母と2人で韓国語の勉強をしています。今後、コロナウイルスが収まり、韓国へ旅行できる状況になったら、必ずまたそのお店へ行きたいと思います。その時には韓国語で、感謝の気持ちを伝えたいです。

私と母は幸いにも、コロナウイルスの感染がここまで拡大する前に、韓国旅行に行くことができました。旅行時期がもう少し遅ければ、旅行に行くことはできなかったと思います。今は、以前のように自由に旅行することもできず、世界がとても難しい状況に直面しています。毎日のニュースで気持ちが暗くなったり、韓国に行くことができず悲しんでいる人々が日本にもたくさんいます。私も気持ちが暗くなることがありますが、母と2人で韓国旅行に行ったときの写真を見返しながら、当たり前だと思っていた日々が幸せであることを分かることができましたと感じています。なので、コロナウイルスの感染が落ち着いて、次に韓国に行けるときには、前に行ったときよりも、もっと幸せを感じながら楽しむことができると思います。またいつか韓国へ行き、韓国語を話しながら、母と思い出の場所を増やしたいです。

佳作

北漢山の山の神

浅野秋生〔滋賀医科大学〕

友人とソウルに行った時のこと。「食い倒れ」をテーマに、3日間うまいものをたらふく食べて大満足。さあ帰ろうとなった仁川空港で、僕の間抜けなミスが発覚した。帰りの航空券を1か月後の日付で予約していたのだ。

友人は同情しつつもさっさと帰ってしまった。薄情者！…と怒ってもしようがない。僕は泣く泣く翌日の便を予約した。

さて、ちょうど24時間、ぼっかり空いてしまった。空港のベンチに力なく座り、ぼんやりスマホで「ソウル 一日 暇つぶし」などと検索してみる。

目を引く画像があった。山の画像だ。ただの山じゃない。険しい岩壁とそびえたつ奇岩群が迫力満点の山だ。「ソウル近郊 日帰り登山」とある。

「北漢山か…」

そうつぶやいた時にはもう、僕はいそいそと電車に乗り込んでいた。何を隠そう、僕は大学で山岳部に所属。大の山好きなのだ。災い転じて福となす。

しかし山は甘くない。特に、今頃は飛行機の中で爆睡している予定だと高をくくって、前日にほとんど徹夜で騒いでいたような大バカ者には甘くない。装備も山向きではない。食料も水も足りない。

山岳部では「備えの足りないものは山の神に怒られる」といって新入生を脅す伝統があった。山の神は今の僕にさぞや憤激していることであろう。

亀のような歩みの僕の横を、楽しげなカップルや元気いっぱいの子供たち、しっかりした足取りのおじいさんなどが次々と追い抜いていく。週末で、山は盛況だ。僕だけ青息吐息。景色も目に入らない。

どうやら頂上まであと少しというところまでできたが、食料は底をつき、水もほとんどない。足が動かない。

「もうあかん…」

荒い息をついて立ち止まっていると、急に背中を力強く押された。びっくりして振り返ると、満面の笑顔のおばさんが。何やら楽しそうに叫びながら、僕のリュックをグイグイ押しているではないか！

見知らぬ他人の背中をグイグイ押す人に山で出会ったのはこれが初めてだった。いや、山でなくても初めてだった。あわてながらも、おばさんの手のあまりの力強さと、「こりゃ楽ちんだ」という、ちょっぴりずるい気持ちで、自然と笑い声がこぼれた。頂上が少しづつ見え始めた。

僕は韓国語がチンプンカンプンで、おばさんは日本語がチンプンカンプンだ。けれどおばさんはお構いなしにしゃべる。僕も負けじとしゃべり返す。変な二人連れに、僕を追い抜いて行った人たちがびっくりして道を譲る。

楽しい気分していると、山頂はすぐだ。あっという間に僕は最高峰の白雲台についた！

一息ついて初めて、美しい紅葉と巨岩が織りなす絶景に気が付いた。涼しい風が吹き抜ける。最高だ。

おばさんは大きなバッグから手作りの弁当を取りだし、僕にくれた。ちょっぴり辛かったけど、うまかった。弁当に舌鼓を打ち、景色を楽しんでいると、おばさんの姿はもうない。どうやらさっさと下山してしまったようだ。

「まさか山の神じゃあるまいし」

ひとり呟いて、僕は上機嫌だった。

佳作

花束の輪

池田優菜〔上智大学〕

大学1年の3月、ずっと憧れてきた韓国旅行の夢が実現した。すれ違う人たちの会話から聞こえる韓国語、ドラマで馴染みのある風景、そして本場の美味しい韓国料理。目にするもの耳にするもの、口にするもの全てが夢のようで、私の心は幸せに満ち溢れていた。

到着した日は、ちょうど3月14日のホワイトデー。雑貨屋やお菓子屋には、ありとあらゆる可愛らしい商品が並んでいた。しかし驚いたのは、花束を持って街を歩く人の多さだ。

「きっと今から大切な人に届けに行くのだろう。」「大切な人からもらったのだろう。」

愛や幸せに満ち溢れた表情を見ると、その人のストーリーを想像し私まで幸せな気持ちになった。花束は見た目の美しさだけでなく、その色や花言葉からも想いが伝わる愛の込められた贈り物だ。愛をお返しするホワイトデーに、この贈り物を選ぶ人が多いこと。日本ではあまり見かけることのない素敵な光景に、私は強く感動を覚えた。

予約していたゲストハウスへ向かい、私は早速オーナーの方にこの感動を伝えた。すると、韓国では誕生日や卒業式など祝いの日だけではなく、小さな記念日やお礼を伝える日にも花束を贈る文化があると教えてくれた。また日常的に花束を贈るからこそ、駅や街中にも花屋が多いことも。なんと花束の自動販売機まであるらしい。

日本へ戻る日、チェックアウトを済ませるとオーナーの方が小さな花束をくれた。

「私たちがとの出会いに感謝」と言って。私はその花束をドライフラワーに加工し、現在も部屋に飾っている。韓国で出会った人々や幸せな時間を思い出させてくれる宝物だ。

そんな素敵な贈り物を受け取った私は、今度は自分から花束を贈ることに挑戦した。誕生日を迎える相手を想像しながら花を選び、小さな手紙を添えてプレゼントした。韓国で得た「花束の輪」を日本で広げることが出来たのだ。

次に韓国へ行くときには、オーナーにお返しの花束を買って渡しに行こう。どんな色の花にしようか、どんな言葉を添えようか、喜ぶ顔を想像しながら悩む時間も最高の時間だ。

佳作

報道されないけれど存在する、確かな交流

倉次みのり〔東京都〕

数年前から沸き起こった第三次韓流ブームに影響され、私も韓国の映画やドラマ、音楽を楽しむようになった。日本のものとはまた違う魅力を持った作品に触れ、心を揺さぶれるような感動をもらうことが多く、かなりハマっている。

日本では韓国のエンターテインメントのブームが度々起こるが、韓国で日本のドラマや音楽が人気だという話はあまり聞こえてこない。政治的な問題は根深いし、反日教育も今だにあると聞き、やはり韓国の人たちは日本が好きではないのかな……そんな不安が常に心の隅に引っかかっていた。

しかし、ソウルの大きな書店を訪れた時、私は思いがけない光景を目にした。村上春樹さんと東野圭吾さんの作品が大きな平台いっぱいディスプレイされていたのだ。海外の小説家の翻訳本がこれほどのスペースで展開されているのを、日本の書店では見たことがない。聞けば、お二人の人気は韓国で最高の売り上げを誇るほどだというのだ。

さらに驚いたのは、「100万回生きた猫」で有名な絵本作家・佐野洋子さんの特別展が行われていたことだった。佐野洋子さんは日本を代表する絵本作家ではあるが、一般的な知名度はそれほど高いとは言えない。まさかソウルで特別展が行われているなんて、想像もしていなかった。そしてその特別展にはたくさんの人がいらしていた。小さなお子さんを連れだご夫婦がニコニコと絵本を選び、小学生らしき男の子たちが座り込んで絵本を読みふける様子に胸が熱くなった。私が韓国のエンターテインメントに感動するのと同じように、韓国の方々も日本の文学に心を動かされているのだ……と実感できて、胸が熱くなった。文化的な交流がジャンルは違えど、双方向で静かに、でも着実に育まれているのだと思えた。

そして2019年の夏、私は何度目かのソウル旅行に出かけた。当時、日韓関係は最悪の状態、日本製品の不買運動の様子が連日報道されていた。「嫌な思いをすることもあるかも…」と覚悟しながらの渡韓だった。

しかし、私はその旅で初めての経験をした。ソウルのコンビニの店員さんから「僕は日本が好きですよ」と声をかけられたのだ。東大門や明洞でも「大変な時期なのにソウルに来てくださってありがとう」と言われた。

政治的な問題が激化していく中、メディアでは報道されない一般社会で生きる普通の韓国の人たちが日本人を気遣って、努力してくれていた。「経済を回す観光客だから優しくするんだ」という見方をする人もいるだろうが、「日本が好きです」「ありがとう」と言われた事実や、笑顔を交わし合えたことが素直に嬉しかったし、私の韓国熱はさらに高まった。

これからも、日韓の間で政治的な問題が起き、メディアを賑わすだろう。しかし、一方で大々的に報道されない現実社会では着実に文化的、人間的な交流は生まれ、深まっている。政治的に不安定な今だからこそ、そんな交流こそを大切にしたいと思う。

佳作 初心

佐藤 栞 [二松学舎大学]

韓国人でもない、日韓ハーフでもない、韓国と縁もゆかりもなかった私が韓国という国に興味を持ち早6年目となる。k-popの魅力に取り憑かれ、言葉もろくに勉強しないまま渡韓を決意した高校1年生の夏が懐かしい。もし今の自分が初めて韓国へ行くと仮定したとしたら両国の関係について学んだあとだからこそたくさんの不安要素が頭に浮かんできってしまうと思う。何も知らないまま海外へ赴いた15歳の決断に今の自分から頑張ったの一言を添えたい。

k-popという縁から繋がった友人と会うたびに発する合言葉は「韓国行きたい」であった。Instagramやサイトから当時の日本では流行していなかった可愛いカフェや服を目にするたびに韓国への想いが募っていった。この合言葉に聞き飽きた頃、ついに我慢できなくなった私と友人は韓国に行きたい、と言う気持ちだけでパスポートの申請、飛行機、ホテルの予約、今までしたことのなかった海外へ飛び立つ支度を始めたのであった。憧れであったパスポートを手にした際の胸の高鳴りを忘れることはないだろう。

しかし「旅行にハプニングはつきもの」とはよく言ったものだ。乗る予定だった飛行機は雨のため遅延、韓国に着けるのか、ホテルへの連絡は、でも韓国語でどう伝えればいいのか、と呆然としていた時、私たちを見ていた日本人と韓国人の2人のお姉さんたちに声をかけていただき、韓国語の話せるお姉さんたちがホテルへの連絡をして下さったのだった。なんと乗る予定だった飛行機も同じであり、深夜便へと変わった飛行機を降りたあとも危ないからとホテルまでタクシーで同行していただいた。

タクシーから見た韓国の夜の風景はとても輝いていて眩しかった。初めての異国の地を目の当たりにした時、何故かほっと心が落ち着いたのを覚えている。普通なら不安、怖さを感じるものなのかもしれないが、日本という母国から飛び立ち、私自身のことを誰も知らない外国での「自由」を感じ取ったのであろうか。

この2泊3日はカムサムニダと感謝することはばかりだった。覚えてたの韓国語を使って見ず知らずの道ゆく韓国人に道や行き方を尋ね、日本人と韓国人、似ているようで似ていない2カ国の人々ではあるが「思いやり」は両国共通であったと思う。自分たちの目的を果たそうと必死になったあの夏は私にとってかけがえのない経験となり、今でも私を支えている。

この先いつ韓国へ行けるか分からないコロナ渦の現在、改めて韓国での思い出や韓国の良さに浸る絶好の機会と考えている。外国に行くこと、それに留まらず人と会うこと、大声で笑うこと、当たり前になっていたことがどれだけ難しいことなのか、私も含め人々は少し幸せになりすぎていたのかもしれない。だからこそ自粛を踏まえ、再び韓国に行けるようになった時は、あの15歳の初心の気持ちを思い返して新しい目線でもう1度韓国の街並みをゆっくりと見渡してみたい。

最優秀賞

내가 ‘정’ 을 느낀 순간

澤路梨華 [長崎県立対馬高等学校]

저는 초등학교 때 당시 일본에서 인기가 많았던 카라를 만나서 음악뿐만 아니라 드라마나 음식, 문화 등 한국의 다양한 분야에 관심을 가지게 되었습니다. 제가 한국여행이나 한국에 대해서 공부하면서 느낀 한국은 ‘정’ 이라는 말로 표현할 수 있습니다.

한국 드라마나 예능 프로그램 등의 방송을 보고 있으면 ‘우리’ 라는 말이 많이 나옵니다. 한국어 ‘우리’ 는 ‘私達’ 라는 뜻이지만 일본에서 쓰는 ‘私達’ 의 의미와는 조금 다른 부분이 있습니다. ‘우리’ 라는 말에는 한국 사람의 따뜻함과 공동체 의식이 담겨 있습니다. 실제로 제가 부산에서 홈스테이를 했을 때의 일입니다. 만난 지 얼마 안 됐는데도 불구하고 호스트 패밀리가 저를 “우리 리카” 라고 불러 준 것이 아니겠어요? 저는 그 때 호스트 패밀리가 진짜 가족처럼 느껴졌고, 너무나도 기뻐던 것을 기억하고 있습니다. 즉, ‘우리’ 라는 말은 주위의 사람을 소중하게 생각하는 한국 사람의 ‘정’ 을 잘 표현하고 있는 것이 아닐까요.

한국 사람의 정을 인사에서도 느낄 수 있습니다. 한국 사람들은 “식사하셨어요?” 라는 인사를 자주 사용합니다. 저 역시 제가 좋아하는 한국 연예인의 이벤트에 참가했을 때 “식사하셨어요?” 라는 말을 들은 적이 있습니다. 저는 행복한 생활을 보내기 위해서는 식사가 매우 소중한 것이라고 생각합니다. 그렇기 때문에 특히 이 인사말에서 상대의 건강과 행복을 바라는 한국 사람의 정을 느낍니다.

이뿐만 아니라 한국 사람의 정은 행동에서도 나타나고 있습니다. 예를 들면 드라마에서 많이 나오는 장면, 반찬을 밥 위에 올려 주거나 고기를 상추로 싸 주는 것입니다. 처음 봤을 때는 조금 신기했지만 잘 생각해 보면 “식사하셨어요?” 라는 말과 마찬가지로 “많이 먹어 주면 좋겠다.” “제대로 먹어 주면 좋겠다.” 라는 마음이 나타나고 있어서 너무 따뜻한 행동이라고 생각합니다.

또한 부모님이나 어른을 공경하는 마음, 주위와의 협조, 작은 것도 나눠 주는 마음 등 한국 사람의 정은 일본어로는 표현할 수 없는 부분이 많이 있다고 생각합니다. 물론 한국 사회의 모든 것이 정으로 성립하는 것은 아니지만, 한국에 대한 공부나 한국 사람과의 교류를 통해서 많은 정을 느낄 수 있었습니다. 그렇기 때문에 저도 그 ‘정’ 부터 배워서 주위 사람에 대한 배려를 소중하게 하고 한국과 한국어에 대한 이해를 높이고 싶다고 생각합니다.

優秀賞

내가 느낀 한국

栗栖杏〔広島市立基町高等学校〕

작년에 히로시마 경제대학교에서 대구 영남대 최범순교수님의 강연을 들을 기회가 있었습니다. 오늘 저는 그 강연이 없었다면 평생 모를 수도 있었던 합천에 대해 소개하려고 합니다. 합천이 왜 한국의 히로시마라고 불릴까요?

때는 제 2 차 세계대전의 끝무렵, 히로시마에 원폭이 떨어져서 약 14 만명의 목숨을 앗아 갔습니다. 그중 약 10 퍼센트는 강제징용 등으로 조선에서 노동을 하러 오셨던 분들이고 그 조선인 중 70 퍼센트가 합천에서 오신 분들입니다. 이게 바로 합천이 한국의 히로시마라고 불리는 이유인데요. 한국에서도 이 사실을 아는 이는 많지 않고, 실제로 최 교수님도 합천에 대해 연구하기 전까지는 전혀 몰랐다고 합니다. 그렇기 때문에 최 교수님은 이 사실을 한국과 전세계에 알리고 싶다고 하셨습니다. 히로시마의 원폭은 전세계가 아는 사실이지만 그중 한국인의 희생자도 포함된 것을 잊을 수도 무시할 수도 없는 사실입니다. 그러므로 8 월 6 일에 묵념할 때는 일본인 뿐만 아니라 한국 그리고 다른 나라의 희생자들도 기려야 할 것입니다. 이런 역사적 사실 때문에 우리는 핵이 없는 세상을 만들기 위해 작은 일부터 시작해야 합니다. 혼자서 목소리를 내면 작겠지만 여럿이 함께 내면 큰 울림이 되듯 우리도보다 많은 사람들이 협력하면 세상을 바꿀 수 있을 것입니다.

작년에 히로시마 시내에서 매년 개최되는 국제 페스티벌에서 작년 여름 국제 교류로 대구에 갔을 때의 경험을 발표할 기회가 있었습니다. 방문하기 전에 대구에 대해 알아볼 시간이 있었는데 그때는 문화나 관광지만을 알아보고 합천에 대해서는 전혀 몰랐습니다. 실제로 대구까지 방문하고도 합천에 대해 몰랐던 것은 창피한 일입니다. 페스티벌에서는 핵 없는 세상을 만들기 위한 서명이 있어서 저도 힘을 보탤했습니다. 그저 이름을 쓰는 그 작은 행동에 수많은 사람들이 참여한다면 큰 힘이 될 것입니다.

저는 그 강연을 듣고 제가 사는 일본과 제가 너무나 좋아하는 한국이 원폭 피해를 입은 것을 알고 더이상 희생자가 나오지 않았으면 하는 바람이 생겼습니다.

한일 양국이 더 친해지고 협력해야만 이 사실을 전세계에 알릴 수 있을 것이고 지금의 정치외교에 조금이라도 발전이 있어야만 평화로운 세상으로 거듭날 수 있을 것으로 생각합니다. 전쟁에 피해자는 꼭 일본인 뿐만아니다. 세계 곳곳의 사람들이 피해를 입은 것을 인지하여 절대로 다시는 일어나지 않도록 해야 합니다.

優秀賞

우리 공유하지 않을까요 ?

岩田せり [済美高等学校]

최근 'NIZIU 프로젝트'가 일본과 한국에서 화제가 되었다. 일본인 아이돌 그룹을 선발하는 오디션으로 한일 기획사가 공동으로 제작에 참가하여 큰 성공을 거뒀다. 한일 관계의 어려운 상황 속에서도 NIZIU 프로젝트와 같은 문화 협력이 시도되고 좋은 성과를 남겼다.

요즘 나와 같은 일본 10대들은 방탄소년단, 트와이스와 같은 K-POP 아이돌 가수의 노래에 흠뻑 빠져 있다. 한국 드라마 '이태원 클라쓰'도 대단한 인기다. 한국에서는 화면 속 그림이 현실적인 일본 애니메이션이 널리 사랑받고 있다. 정치적, 역사적인 면에서 여전히 갈등과 어려움이 있지만 한일 청소년들은 서로의 문화에 대해 많은 관심과 애정을 가지고 관련 정보를 유튜브나 SNS를 통해 적극적으로 공유한다. 나는 방탄소년단의 팬클럽인 '아미'에 가입할 정도로 열혈 팬으로 매일같이 트위터나 인스타그램을 확인하고, 한국의 팬들과도 정보를 교환한다. 그리고 그 정보를 주변 친구들에게 적극적으로 보내 준다. 그러면 K-POP에 관심이 없던 친구도 어느새 방탄소년단에 입덕한다.

코로나 19로 인해 인적 교류가 점점 어려워지는 상황 속에서 온라인 공간을 통한 문화적 공유는 상대방을 이해하는데 중요한 역할을 한다, 특히 서로 간의 공감대가 넓어져 정치적인 대립도 완화한다. 또한 여러 분야에서 다양한 이익도 창출한다. 예술 분야에서는 창조적인 사업의 확장과 같은 경제적인 혜택도 준다. 앞서 언급한 NIZIU 프로젝트는 두 나라의 장점을 살려 협력한 좋은 성공사례다.

양국 관계가 항상 좋은 것은 아니지만, 김대중 전 대통령의 말씀처럼 한국과 일본은 서로에게 필요한 이웃이다. 한일 간의 특별한 관계를 깊이 이해하고 새로운 협력의 시대를 만들어야 한다. 그러기 위해서는 한일 문화 공유를 더욱 활성화하는 것이 중요하다. 양국이 가지고 있는 문화적 잠재력을 기반으로 NIZIU 프로젝트와 같은 창의적 공유 시스템을 만드는 것이다. 즉 문화적 공감대를 확장하고 서로의 장점을 살리는 한일 문화 공유 프로젝트를 다양한 분야에서 추진하는 것이 필요하다.

佳作

내가 느낀 한국

赤林涼夏 [愛知県立岩倉総合高等学校]

처음에 나는 한국에 아이돌 가수가 많다고 느꼈다. 내가 한국의 아이돌을 처음 알게 된 계기는 오래전 당시 일본에서 활약하고 있던 카라였다. 그 이후로 소녀시대, 레인보우, 샤이니, 동방신기 등 많은 아이돌 가수들을 알게 되었고, 한국에는 아이돌도 많고 그만큼 방송데뷔도 쉽다고 생각했다. 하지만 이후에 접하게 된 한국의 오디션 프로그램을 시청하게 된 나는 많이 다른 현실에 깜짝 놀랐다.

한국에서 아이돌은 그저 귀엽고 멋있고 행복할 것만같이 보이지만 현실을 그렇지 않았다. 뛰어난 춤이나 가창 실력을 바탕으로 한 많은 노력이 필요하다는 것을 알게 되었다. 몇 년간의 훈련기간을 거쳐야 하는데, 아이돌이 되는 것은 낙타가 바늘구멍을 통과하듯이 아주 좁은 문을 통과해야 하는 어려운 일이었다. 게다가 데뷔를 시작했다고 해서 반드시 성공하는 것도 아니다. 음원이 팔리지 않거나, 활동도 못해보고 해체하기도 하는 힘든 길인 것이다.

이런 현상은 아이돌에게서만 국한된 이야기가 아니다. 수험생에게도 마찬가지였다. 한국은 학력 사회여서 대학에 들어가든 취직하든 경쟁률이 높다고 한다. 그 경쟁자를 이기기 위해서는 많은 공부를 해서 높은 학력을 가져야 하는 것은 기본이며 그 외의 사회활동 및 많은 백그라운드를 가져야 한다. 안일한 가벼운 마음으로는 치열한 경쟁속에서 살아남는다는 것은 통하지 않는 것이다. 예를 들어서 인터넷으로 본 한국 수험생의 하루의 스케줄은 밥, 목욕, 부족한 수면시간에 매일 공부에 쫓기는 날들이었다.

이에 비해서 일본은 한국만큼 학력사회가 아니기 때문에 명문대학을 목표로 하지 않는 한 비교적 자유롭다. 나도 수험생이지만 한국의 수험생 생활에 비교하면 그렇게 경쟁해야 하는 치열한 환경은 아니다. 때로는 공부하는 시간을 조금 미루고 친구들과 놀러가기도 한다.

하지만 지금은 편한길만 택하기에는 상황이 많이 안좋아져있다. 코로나로 인해서 올림픽이 무산됐고, 경제적으로도 안 좋아져서 우리가 취업할 때에는 취업할 곳이 없을 수도 있다. 이런 상황에서 취직 자리를 얻을 수 있는 사람은 고학력자들이 될 것이다. 그러므로 지금 편한 길을 택하면 그만큼 앞날이 힘들다는 현실을 인지하고, 고생스럽지만 더 노력한다면 이후 힘들었던 만큼 좋은 방향으로 나아갈 수 있을 것이라 생각한다.

그래서 한국 사람들과 같은 노력이 지금 우리에게도 굉장히 필요한 일이라는 것을 느꼈다.



佳作

내가 느낀 한국

和泉こゆき [東京都立目黒高等学校]

한국에 관심이 없는 사람에게 “한국에 대해서 어떤 이미지를 가지고 있습니까?” 라는 질문을 하면 뭐라고 대답할까. “케이팝”, “김치” 라는 사람도 있겠지만 아마 유감스럽게도 현대를 살고 있는 우리들은 정치나 역사등의 일로 인해 차가운 이미지를 가지고 있는 사람도 적지 않다고 생각한다. 실제로 한국에 대해서 좋지 않은 이미지를 가진 일본 사람은 다른 나라보다 많다는 데이터도 있다. 그 이유는 한국을 잘 모르는 사람이 국제적인 정치에 대한 뉴스등은 보기만하고 한국을 이해하기 때문이라고 생각한다. 이전까지는 나도 솔직히 한국에 대해 특별히 좋은 이미지를 갖고 있지 않았다. 하지만 그런 생각이 180도 바뀌는 놀라운 일들이 있었다.

아직 내가 “안녕하세요” 정도밖에 말할수 없을때, 처음 한국여행에 갔다. 그때는 아직 한국을 잘 몰랐기 때문에 조금 불안한 마음을 가지고 있었다. 여행을 하던중 우연히 들었던 음식점에서, 내가 일본인이라는 것을 안 점원분이 서투른 일본어로 나를 대해줬다. 길을 잃어서 어느 가게에 들어가서 물어봤을 때는, 그 가게의 사람은 같이 따라가서 가르쳐주셨다. 일본에서도 그렇게 해주는 사람은 많지 않아서 정말 감동했다.

또한 내가 다니는 학교에서 한일교류회가 있었다. 그날 나는 긴장하고 있어서 스스로 말을 걸 수 없었다. 그때 한국인 학생이 먼저 말을 걸어줬다. 서로의 나라의 문화나 음악, 지금 유행하는 패션이나 말 등, 나라는 달라도 많은 이야기를 하고 즐거운 시간을 보냈다. 끝날때는 선물도 받았다. 나는 이런 따뜻한 마음이 대단히 기뻐다. 이렇게 내가 경험한 것은 이전에 느끼고 있었던 차가운 이미지와는 전혀 관련이 없었다.

이것들을 통해서 한국은 상대한테 뭔가를 해주려고 하는 적극적인 마음이 가득한 친절하고 따뜻한 나라라고 느꼈다. 반대로 일본은 많은 간섭을 하고 싶지 않아하는 나라이기 때문에 신선하게 느껴졌다. 경험하지 않으면 모른다는것, 즉 실감한 사람만이 아는 것이라고 생각한다.

그래서 나는 한국의 좋은 것을 일본에 전하는 일을 하고싶다. 이전의 나처럼 이유도 없이 남들과 똑같이 선입견을 가지는 사람들이 많다. 나는 그런 사람에게 한국의 따뜻함을 알려줘서 두 나라가 서로를 적극적으로 인정하는 세상이 될 수 있도록 힘을 쓰고 싶다.

“모두가 서로를 잘 이해하려고 하면 반드시 서로의 좋은 것이 보이게 된다.”

이 마음을 계속 가지고 앞으로도 한국과 일본의 더욱 좋은 관계를 바란다.

佳作

내가 느낀 한국

五月女彩海 [神奈川県立神奈川総合高等学校]

“한국에서 맛있는 갈비를 먹고 싶어요!”

초등학교 4학년 때 말한 이 말 한 마디가 지금의 나를 만들 줄 누가 알았을까?

한국 드라마의 팬이었던 할머니의 영향으로 어릴 때부터 한국과 친했던 나는 한국 요리는 “맵다, 아! 정말 맵다” 였다. 어느 날 우연히 본 드라마에서 주인공들이 고기를 아주 맛있게 먹는 것을 본 나는 “맵지 않은 것도 있네!!!” 라고 생각했다.

그해 봄에 우리 가족의 첫 한국여행에서 또 다른 한국도 알게 되었다. 그건 바로 귀여운 화장품과 아이돌이다. 그 덕분에 한국어를 배우게 되었다. 정말 다행스럽게도 지금 다니는 고등학교는 한국어 수업이 있다.

열심히 공부한 나는 올해 3월에 3번째가 되는 한국 방문을 계획하고 있었다. 이 여행을 위해 가이드 북이나 인터넷에서 가 보고 싶은 유적과 카페, 드라마의 촬영지를 체크했다. 그리고 지난 여름에 우리 학교와 파트너인 한국 학교와의 교류에서 만난 몇몇 친구들과는 연락도 하며 함께 한복도 입고 경복궁에서 사진을 찍을 약속도 했다. 홍대 앞 카페, 쇼핑 계획 등 우리는 서로 배우기 시작한 한국어와 일본어를 쓰면서 손꼽아 기다렸다. 하지만, 전 세계적으로 문제가 되는 신종 코로나 바이러스 때문에 갈 수 없게 되었다. 설마 설마 했다. 관찮을 거라고 생각했는데 정말 화가 났다. 지금은 언젠가는 갈 수 있을 거라고 생각하며 좋아하는 한국 드라마나 K-POP 으로 위안을 삼으며 한국어 공부를 하고 있다.

그이런 내 마음 속 깊이 남아 있는 한 마디가 있다. 처음 한국을 방문했을 때 한국을 안내해 준 아버지의 친구인 나영 언니가 내게 해 준 말이다. “좋아하는 마음이 있으면 무엇이든 이룰 수 있어!” 라는 것이다. 정말 그런 것 같다. 아니 그렇다. 그렇기 때문에 한국에 못 가는 나는 친구들과 언젠가는 만날 수 있을 거라고 서로 격려하며 지금도 재미있게 공부한다. 지금의 나에게는 한국어는 정말 멋진 보석과 같다.

한국에 못 가서 우울해 하던 나에게는 한국 친구의 따뜻한 말, 한국인의 정을 느꼈다. 휴교로 여행도 못 가고 연락도 잘 안 되는 것은 정말 슬프지만 우리 가족을 마치 자신의 가족처럼 걱정해 준 친구의 마음을 알게 되어 정말 기쁘다. 지금도 소원을 비는 마음으로 가이드 북에 포스트잇과 메모를 그대로 두었다. 내 마음에는 항상 한국 친구가 있다. 빨리 만나기를 정말 정말 바란다.

佳作

내가 생각하는 양국의 미래

長谷純奈 [滋賀県立国際情報高等学校]

나는 한국과 일본이 지리적으로 가깝고 긴 역사를 함께 해 온 만큼 가까운 미래에 좋은 관계가 되리라 믿는다.

일본은 지금 한국의 문화가 국내에 많이 정착되어 있다. 정치적으로나 경제적으로 한국과 사이가 악화되고 있으나, 일본에서는 한국의 음식이나 패션, 미용, 엔터테인먼트등 많은 분야에 흥미를 나타내는 젊은이들이 늘고 있다.

이것은 젊은이들 사이에서 사회와 정치의 무관심이 결국 흥미와 재미를 추구하는 문화를 따르려는 것은 아닐까? 지금 양국은 여러 사회 문제가 존재하고 있다. 한국은 빈곤의 차이에서 오는 문제와 과잉학력에도 불구하고 취직의 불균형과 저출산 그리고 고령화 문제가 큰 과제라고 할 수 있을 것이다. 이런 과제를 해결하기 위해서는 장래의 젊은이들이 사회의 문제등 정치 경제에 눈을 떠야 한다.

더 나아가 세계의 문제도 함께 공유해야 한다고 느낀다. 그러기 위해서는 지금의 기성세대들이 젊은이들에게 사회문제에 눈을 뜰 수 있도록 길잡이 역할을 해 주어야 할 것이다.

한국에서는 요즘 사회적 문제를 거론한 영화나 드라마가 많이 있다. 드라마 ‘사랑의 불시착’에서는 북한과 한국의 국제관계에 대해, 또 아카데미 수상작인 ‘기생충’은 빈부격차와 저출산 고령화 문제에 대해 시사하는 바가 크다. 이런 사회 문제를 이슈로 하는 작품들이 더 많은 젊은이들을 끌어들이야 할 것이다. 일본은 식문화, 애니메이션, 만화등 세계적으로 영향력과 파워가 있다고 생각한다. 소중한 문화를 더욱 발전시켜 세계가 원하는 것이 무엇인가, 세계를 하나로 공유할 수 있는 힘은 무엇인가 관심을 갖게 해야 할 것이다.

안타깝게도 일본과 한국은 서로 정치적 역입장에서 대립하고 있다. 어렵고 시간이 걸리더라도 양국의 좋은 점은 본받고 나쁜 점은 보충하며 조금씩 실타래를 풀어가야 한다고 생각한다. 앞으로 글로벌화되는 세계 속에서 동아시아의 중심인 한국과 일본은 외국인에 대한 복지나 사회적 입지도 고려하면서 살기 좋은 환경을 만들고 함께 공존하는 중요한 역할을 해야 한다고 생각한다. 언젠가 기회가 된다면 한국의 학생들과도 교류를 통해 많은 생각을 공유해 보고 싶다. 서로를 이해하는 마음이 커지면 좋은 관계가 유지될 것이라고 믿는다.

最優秀賞

엇박자의 아름다운 조화 부산

池邊新菜 [帝塚山学院大学]

『우리 집의 창문에서는 동해가 보인다』라는 작문을 하면서 문득 이런 생각이 들었다. 한반도와 일본 열도에 둘러싸인 바다의 명칭을 두고 한국과 일본은 대립 중이다. 동해가 역사적으로 ‘동양해’ 또는 ‘한국해’로 불리어 왔으므로 ‘동해’가 맞다고 주장한다. 일본은 19세기부터 ‘일본해’가 국제적으로 통용된 이름이라며 이것이 맞다고 주장한다. 아름다운 바다의 명칭을 두고 다투고있는 두 나라의 관계에 조금 착잡한 마음이 든다.

한국에 6개월 동안 유학을 갔을 때, 예쁜 바다가 꼭 한 번 보고 싶어 부산으로 향했다. 부산 역 근처를 걷고 있자니 서울과 다른 느낌의 특이한 글씨체의 간판들이 눈에 들어왔다. 부산의 그것은 드라마를 통하여 보았던 1990년 후반의 느낌이 물씬 풍겼다.

둘째 날은 부산역 옆에 있는 남포동 국제시장에 갔다. 시장에서 조금 더 걸어가자 흥대의 변화가와 비슷한 장소가 나왔다. 그러나 흥대와 달리 팝송이나 케이팝이 아닌 재즈나 트로트가 흘러나오고 있었고 관객들의 세대 또한 다양했다. 남포동은 모든 세대가 공존하고 있었고 음악을 통해 서로 소통하고 공감하고 있었다. 저녁을 사러 들어간 회센터에서는 투박하면서 구수한 부산 사투리의 아주머니들이 (아가씨 ~ 오이쇼 ~! 어디 가노 ~?)하고 우리에게 말을 거셨다. 횃집 아주머니는 억센 사투리와 살짝 부조합스러운 환한 미소를 띠고 있었고 일본에서 온 우리에게 낙지까지 선물해 주셨다. 투박한 말투와 대조를 이루는 아주머니의 따뜻한 마음에 한국이 더 좋아졌다.

숙소에서 보이는 부산 동해 바다는 현대식 건물과 어우러져 장관을 이룬다. 고향의 일본해를 떠올린다. 같은 바다임에도 그때의 나에게서는 부산의 동해 바다가 훨씬 더 예뻐 보였다. 그것은 아마 강한 억양의 부산 사투리와 대조적으로 다정 다감한 부산 사람들이 만들어내는 절묘한 하모니에 취해 있었기 때문일 것이다.

젊은 세대와 연세 드신 분들의 절묘한 조화, 억센 부산 사투리와 따스한 마음의 절묘한 만남, 20세기와 21세기가 같이 공존하는 부산. 그래, 동해도 좋고 일본해도 좋다. 우리 젊은 세대는 이런 부산처럼 대립이 아닌 절묘한 조화로 한국과 일본을 만들어 나가야 한다. 이와 더불어 동해와 일본해라는 명칭이 세계지도에서 같이 어우러지면 어떨까 하는 생각을 했다. 내가 좋아하는 한국과 일본은 대립이 아닌 공존의 레일 위를 걸었으면 한다. 내가 본 부산처럼 말이다.

優秀賞

내가 느낀 한국

長谷川春奈 [千葉県]

나와 한국의 첫만남은 13 년전, 내가 20 살 때였다. 너무 더운 여름, 친구와 같이 밥을 먹으려고 했다. 뭔가 먹어본 적이 없는 새로운 것을 먹고 싶어서 우리는 좁은 동네를 걸어갔다. 한번도 가보지 않았던 길거리에는 작은 식당이나 술집이 뻗뻗이 들어서 있었다.

그때 「故郷」이라는 이름의 식당이 눈에 들어왔다. 식당 벽에는 기호 같은 문자와 맛있게 보이는 음식사진이 많이 있었다. 어떤 음식을 먹을 수 있을지 모르는데 마음이 설레는 뭔가를 느꼈다.

「어서 오세요」

식당에 들어가니까 주인 아줌마가 인사해 주셨다. 자리에 앉아 메뉴판을 보고 한국음식 식당인 것을 알았다. 우리는 메뉴판에서 매워 보이는 음식, 떡볶이하고 순두부찌개를 주문했다.

조금 기다리다가 아줌마가 음식을 가져왔다. 맛있는 냄새에 침을 삼켰다.

빨간 떡볶이를 먹었다. 매운데 달콤한 맛도 느꼈다. 떡이 부드러워서 맛있었다. 안에 들어있는 오징어도 맛이 배어 있었다. 뜨거운 떡볶이를 우리는 우물우물 먹었다.

그리고 순두부찌개. 순두부찌개도 빨간색이고 부글부글 뜨거워 보였다. 한입 먹었다. 순두부찌개도 떡볶이와 같이 맵지만 달콤한 맛이 있었다. 우리는 땀을 흘리며 먹었다.

그렇게 먹는 우리들을 아줌마는 싱글벙글 미소를 지으며 보고 있었다.

우리는 아주 맛있다는 것을 아줌마에게 전하고 싶었다. 일본어로 말해도 아줌마는 알아 들으셨겠지만 만들어 주신 음식에 감동 받았다는 것을 전하려면 한국어가 좋겠다고 생각했다. 그때는 나도 친구도 한국어를 하나도 몰랐다. 휴대폰에 있는 번역 기능을 사용해 감사의 말을 준비했다. 나는 휴대폰을 보면서 아줌마한테 말했다.

「오늘은 맛있는 음식을 감사합니다. 우리는 한국음식을 좋아합니다. 또 먹으러 올겁니다.」

한국어를 말하는 것이 처음이라서 발음도 잘 못했지만 아줌마는 열심히 들어주셨다. 내 말이 끝나고 아줌마는 몇번이나 감사합니다 라고 말해줬다. 그리고 식당을 나갈 때 선물이라며 김치하고 사탕을 주셨다. 그때 “한국음식은 맛있고 한국사람은 친절하다” 고 느꼈다.

그 후에 나는 한국에 대한 흥미가 생겨서 한국어 공부를 시작했다. 지금은 한국어로 하고 싶은 말을 할 수 있다. 아마 그렇게 열심히 공부한 것은 아줌마가 잘 해주셨기 때문인지도 모른다. 다시 한국음식을 먹으려고 그 식당에 가봤는데 식당은 다른 이름으로 바뀌고 아줌마는 없었다. 언젠가 아줌마를 다시 만나면 휴대폰 번역 기능을 쓰지 않고 내 말로 감사의 마음을 전하고 싶다.

優秀賞

내가 느낀 한국

渡邊玲子 [宮城県]

1974년, 내가 스무 살 때 한국요리를 배운 적이 있었다. 이후 한국요리에 사로잡히게 되었다. 서른 살 때는 첫 한국여행을 가서 한국문화의 바람에 친근감을 느꼈다. 그리고 쉰 네 살이 되던 해 “말이 통하지 않으면 더 좋은 한국을 모른 채 지낼 거야...” 이렇게 해서 한국어를 공부하는 한편, 1년에 한두 번 정도는 한국을 가게 되었다. 지나가는 사람에게 길을 물어보거나 식당에서 먹고 싶은 요리를 주문하기도 했다. “그런대로 내 말은 상대방한테 통하고 있는 것 같은데...” 듣기가 잘 안되어서 하는 수 없이 여러 사람에게 똑같은 질문을 반복하며 연습하고서야 그럭저럭 이해가 됐다. 다행히 어느 누구에게 길을 물어도 모두 친절했다. 초등학생이었던 손주들과 서울로 가족여행을 간 적이 있었는데 지하철 안에서 어떤 젊은 남자가 자리를 양보해 주었다. 첫 해외 여행이라 긴장하고 있던 우리 손주들은 덕분에 긴장이 약간 풀린 것 같았다. 정말 고마운 일이었다.

등산이 취미인 나는 올해 한라산에 갈 계획을 세웠었는데 같이 가려고 했던 사람이 발목을 다쳐서 어쩔 수 없이 혼자서 올라가게 되었다. 그 산 속에서 어떤 아주머니가 나에게 말을 걸어서 일본에서 왔다고 대답하자 “어머! 멀리에서 잘 오셨네요.” 하며 배낭 안에서 오이를 꺼내자마자 절반으로 잘라서 나누어 주셨다. 아무리 등산이 좋아해도 혼자라서 불안했던 나에게는 그 무엇보다 기쁜 선물이었다. 그리고보니 나는 지금껏 몇 번 한국과 일본을 왔다갔다 했지만 잘 해주시는 분들 때문인지 나쁜 추억이 거의 없다.

약동감 넘치는 한국 서울! 시장도 길거리도 활기찬 목소리, 형형색색의 간판, 사람들로 가득 차 있는 골목길. 테이블을 둘러싸고 팔빙수를 먹는 것도 좋고 술 한 잔 하는 것도 좋다. 같이 밥 먹고 수다를 떨어야 친해질 수 있을 것 같다. 슬픈 일이 있을 때 마음껏 울고, 기쁜 일이 있을 때 서로 얼싸안고 함께 기뻐하는 사람들! 슬픔을 참고 기쁨은 웃는 얼굴로만 표현하는 사람이 많은 일본과 꽤 다른 것 같다.

경주의 깊은 산 속, 낙산사에서 바라다 보이는 바다, 천천히 흐르는 제주도의 시간, 뭔가 그리운 느낌이 든다. 일본 어딘가의 시골과 비슷하다. 풍부한 표현력은 일본과 다른 것 같은데 입에 맞는 음식들, 그리움을 느끼게 한 시골의 풍경, 서로 돕는 마음 등... 이런 한국은 오늘도 불가사의한 친근감을 전해준다.

佳作

내가 느낀 한국

津村優希 [神田外語学院]

우리 할아버지는 ‘혐한’ 이셨다.” 한국사람들의 정치적으로 뿌리박힌 국민성이 싫다고 하셨다. 한편, 나는 일본어 자막이 달린 한국의 영상, 일본어를 말하는 한국의 아이돌, 그런 친숙한 "KPOP" 을 좋아한다.

고등학교 2학년 여름에 교환유학의 기회가 찾아왔다. 할아버지는 같이 살고있었기 때문에 홈스테이를 허락해 주시지 않을 거라고 생각했는데 의외로 할아버지께서는 허락해 주셨다. 우리 집에 온 한국 학생은 얌전한 남자였다. 그는 열심히 우리가족과 교류하며 처음 알게 된 일본의 습관과 식사에 하나하나 큰 반응을 보였다. 나도 열심히 내가 알고 있는 일본문화를 소개했다. 그동안 할아버지께서 직접 만드신 일본 요리까지 대접해 주셨다. 그런 할아버지의 적극적인 태도에 나는 깜짝 놀랐다.

하지만 다음엔 시뻘겋게 부어오른 눈으로 돌아온 내가 할아버지를 놀라게 했다. 한글로만 된 간판을 보기만 해도 설렜던 나를, 웃는 얼굴로 맞이해 주신 호스트 패밀리와의 일주일이 시작됐다. 하지만 자막이 없는 한국은 외국이었다. 일본과는 거리적으로는 가까운 나라이지만 외국이었음을 절실히 느낄 수 있었다. 한국의 이문화 감각이 내게는 처음이었다. 하지만 호스트 패밀리는 내 안에 있던 모든 불안을 덜어주었다. 그들의 친척이나 친구들이 찾아와서도 반드시 대화의 고리에 넣어주었고, 일본에도 많은 관심을 가져주었다. 드라마에서 본 것처럼 기복이 심한 면도 보였다. 그러나 내가 하는 말에 친근하게 반응해 주는 그들의 태도는 일본에는 없는 따뜻함이었다. 마지막 날에는 호스트 마더와 파더는 그분들의 아들의 사진뿐만 아니라 내 사진까지 휴대 폰 케이스 안에 넣어 주었다. 평소에 동경하고 있던 땅에서 지낸 짧은 시간이었지만 그 시간이 그리워서 나는 돌아오는 비행기 안에서조차 눈물이 멈추지 않았다. 나는 그때 한국인이 ‘뿌리깊다’ 는 말보다 ‘열정적’ 이라는 말이 더 어울린다고 생각했다. 한국에서 돌아 온 후 할아버지께 그런 이야기를 해 드렸다. 할아버지께서는 웃는 얼굴로 들어주셨다.

귀국 후에도 그곳에서 만난 친구들과의 대화나 한국어 공부뿐만 아니라 SNS 사용법 등을 통해서도 한국인과 일본인의 차이를 아는 경우가 많았다. 일본과 한국은 “비슷한데 왜 이렇게 다를까” 라는 생각을 하게 만드는 면이 많았다. 그런 부분들을 찾을 때마다 할아버지께 공유를 했다. 할아버지는 마찬가지로 한국에 대한 역사나 젊은 시절 한국인과의 교류 체험에 대해 말문을 열게 되었다. 나와는 친하지만 다른 배경에서 살아오신 할아버지. 할아버지와 나는 서로 다른 방식으로 바라 본 '한국' 을 공유함으로써 더욱 깊이 이해할 수 있었던 것 같다.

한국을 좋아하는 손자를 몰래 인정해 준 할아버지께서 한국을 좋아하는지 싫어하는지는 결국 알 수 없었다. 하지만 분명히 말할 수 있는 것은 한국을 더 잘 이해하는 내 모습을 지금은 누구보다 하늘나라에서 계속 지지해 주시고 계실 것이라고 믿는다. 한국에 교환유학생으로 다녀온 지 2년이 지난 지금도 강하게 내 안에 남아 있는 여름의 향수는 앞으로도 나의 한국에 대한 흥미를 계속 불러일으킬 것이다. 그리고 일본인들에게 세대차이 없이 한국이 사랑받는 날을 바라고 있다.

佳作

마니또같은 사람들

吉澄美輝 [帝塚山学院大学]

한국에는 마니또 게임이 중고생 등 젊은 층에서 유행인 모양이다. 마니또라는 어휘가 낯설기만 한 나이지만, 한국에 갔을 때 나는 셀 수 없는 마니또들을 현실에서 만났다.

작년 크리스마스 때 당시 나에게 한국어를 가르쳐 주셨던 선생님께서 파티에 초대해 주셨다. 파티가 열리는 장소는 수원에 있는 경기 상상캠퍼스라는 곳이었다. 수원성으로 유명한 수원이라는 곳...어떤 곳일까? 궁금하기도 하고 선생님도 만나고 싶어서 전철로 2 시간이나 떨어져 있는 곳이지만 우리는 파티에 참가하기로 했다.

전철을 타고 먼 곳까지 가는 것이 처음이어서 참 당황스러웠다. 아직 수원에 도착을 하지 않았는데 종착역이라면서 전철이 멈춰섰다 “아, 이거 실화냐???” 이때 길을 잃은 우리에게 한 한국인 아저씨가 일본어로 말을 건네주셨다. 그러고는 친절하게 일본어로 수원까지 가는 방법을 알려주셨다. 우리에게 일부러 일본어를 써서 안심시켜 주신 것에 일단 감동했다.

우여곡절 끝에 파티에 도착을 했지만 결국 1시간 이상 지각해 버렸다. 하지만 선생님을 비롯해서 다른 참가자 분들도 우리를 매우 반갑게 맞이해 주셨다. 그 파티에는 글을 쓰는 작가, 악기를 연주하는 음악인, 노래를 부르는 아마추어 가수, 학교 선생님, 대학생 등, 다양한 직업을 가진 사람들이 계셨다. 학교를 떠나 여러 분야의 사람들과 만나는 것은 처음이라 좋은 경험과 자극이 되었다. 아티스트 분들의 연주를 들으면서 오간 맥주 한 잔과 요리와 이야기꽃은 모두 한 편의 추억이 되었다.

마니또 같은 여러분은 우리에게 크리스마스 케이크도 선물해 주시고, 선물 교환까지 준비해 주셨다. 이 모든 것들 다 우리 선생님이 나와 친구를 위해 준비해 주신 것이었다. 한국에는 마니또 같은 분들이 왜 이렇게 많지? 비록 말이 통하지 않더라도 서로가 서로를 생각해 주는 배려의 마음이 있으면 즐거움과 행복은 10 배, 아니 그 이상도 되는 것 같다. 그것들은 잔 나뭇가지 사이로 잔잔하게 비추어 들어오는 그런 작은 햇빛처럼 작지만 따뜻하게 빛난다.

이국 땅에서 길을 잃은 우리를 일본어로 구해 준 그 분처럼 일본에서 길을 헤매는 한국 사람들을 보면 한국어로 안내해 드리고 싶다. 코로나가 종식되어 하루빨리 그런 날이 오기를 고대하며 나는 오늘도 졸린 눈을 비비며 단어 하나를 외우고 잠이 든다. 오늘 외운 속담은 ‘소매만 스쳐도 인연이다’

일본에서 곤란에 처한 한국분들의 마니또가 되기 위해 오늘도 노력하련다.



佳作

내 스타일 백김치

吉村幸 [高知県]

나는 40 여년 전부터 매년 겨울이 되면 김치를 담그고 있다. 빨갛지 않으므로 쉽게 말하자면 백김치 같은 것이다. 하루쯤 햇볕에 말린 배추와 한입 크기로 자른 무를 소금에 절인다. 하루이틀 지나 배추와 무의 수분을 짙게 짜고, 여기에 잘게 다진 고추, 마늘, 생강, 파를 소금과 섞어 만든 양념을 얹어 전체를 확확 손으로 꼼꼼히 잘 섞어준다. 마지막으로 비닐을 깔고 누름돌을 얹으면 이제 기다림만이 남는다. 물론 바로 먹어도 되지만, 이렇게 얼마간 숙성시키면 훨씬 더 맛있는 백김치가 완성된다. 때로는 사과나 뱀어포를 넣기도 한다.

이것은 40 년 전에 내가 근무했던 중학교의 선배 선생님께서 가르쳐 주신 방법이다. 그 선생님은 초등학교 시절까지 북한에서 살다가 전후 일본으로 돌아왔는데 자주 그 시기를 그리워하듯 이야기 하시고는 했다. 당시 북한에서 살았던 일본인들도 주위의 북한분들에게 배워서 각 가정마다 김치를 만들어 먹었다고 했다. 겨울이 되면 선생님께서는 본인의 어머님께서 만드신 백김치를 도시락에 싸오곤 하셨는데, 점심시간에 우리는 같이 그것을 나눠 먹는 것이 큰 즐거움이었다. 나를 포함하여 몇몇의 선생님이 그 선생님께 그 백김치 김장법 배웠고, 그 후 나는 학교를 전근할 때마다 선생님들에게 내가 배운 것을 그대로 전수했다.

내가 만드는 백김치는 선생님의 어머님 맛에는 미치지 못한다. 그러나 우리 가족은, 특히 우리 남편은 다양한 절임 반찬 중에서도 내가 만드는 백김치를 가장 좋아해 식탁에 오르면 젓가락이 바빠진다. 남편은 정년퇴직 후 언제든지 나의 백김치를 먹을 수 있도록 야채 재배도 시작했다. 처음에는 무와 파 정도였지만 지금은 김장에 필요한 모든 야채를 수확하고 있다.

작년 한국에 갔을 때, 한국분들과 교류할 기회가 있어 나는 이 백김치에 대해 이야기 했다. 그러자 내 옆에 앉으셨던 남자분께서 ‘거기에 말린 새우를 넣으면 더 맛있어 질 거예요.’ 라고 가르쳐 주셨다. 그래서 지난 겨울은 평소의 방법에 말린 새우를 더해 만들어 보았다. 그러자 정말 한층 깊은 맛의 백김치가 완성 되었다.

앞으로도 다양한 한국분들을 만나 김치를 담그는 비법을 듣게 되면 나는 그것을 내 김장에 응용해 보고 싶다. 해마다 바뀌는 내 김치맛! 나는 앞으로도 김장을 멈추지 않을 것이다. 그리고 김장 뿐만 아니라 언제까지나 한국을 가깝게 느끼고 싶기에 한국어 공부도 더욱 열심히 하려고 한다.

佳作

내가 느낀 한국

岩堀日向子 [昭和女子大学]

내가 체험한 한국은 "진지함"이다.

내가 다니고 있는 대학에는 한국인 유학생이 많이 있다. 나는 공부를 대하는 진지함에 놀랐다. 일본인 학생들이 즐기고 있는 와중에도 한국인 학생은 바른 자세로 교수님을 바라보고 있었다. 일본인 학생들이 책상에 엎드려 있는 중에도 한국인 학생은 노트에 필기했다. 그들은 모르는 것이 생기면 모두 침묵하고 있는 가운데서도 손을 들어 질문했다. 수업을 같이한 학생들은 교류를 겸해 "왜 그렇게 수업에 진지해?"라고 질문하는 경우들이 많다. 돌아오는 대답은 다양하지만 "조금이라도 일본어를 더 알아 들을 수 있으면 좋겠어", "수업이 재미있으니까"라는 대답이 많았다. 아마 교수님이 듣게 되면 눈물이 날 정도의 대답일 것이다.

나는 일본인 학생들은 수업에 이 정도의 의미를 두고 있었을까. 글자 하나, 말 한마디 놓치지 않겠노라고 필사적으로 임했던 적이 있었던가. 매번 수업에서 만날 때마다 긍정적으로 넘쳐나는 에너지를 받았다.

작년 봄, 드디어 나에게도 친한 한국인 친구가 생겼다. 여러 장소에 함께 다니거나 하며 많은 추억을 만들었다. 가족에 관한 얘기부터 연애에 관한 얘기까지 무엇이든지 이야기 할 수 있는 친한 친구였다. 그 친구가 한국에 돌아간 지금도 SNS로 교류를 계속하고 있다. 그 친구는 필사적으로 일본어를 공부했다고 말했다. 실제로 놀랄 정도로 일본어를 잘해서 내가 잘 모르는 숙어를 능숙하게 사용하곤 했다. 내가 한국어를 연습하고 있다고 말하니 흔쾌히 연습 상대가 되어 주겠다고 했다.

계속 배워서 조금밖에 늘지 않는 나를 포기하지 않고 정성껏 가르쳐 주었다. TOPIK 결과에 낙담해 있는 나를 데리고 신오쿠보에 가서, "한 번 더 나랑 힘을 내어 보자"라고 말해 주었던 것을 잊을 수가 없을 정도로 감사하고 있다.

그녀에게 왜 그렇게 일본에서 열심히 했는지에 관해 물어본 적이 있다. 대답은 "가족들이 열심히 번 돈으로 유학을 했으니까. 대기업에 취직해서 안심 시켜 드리고 싶어."였다. 나는 그 친구가 일본에 있는 동안만이라고 계속 잘해주자라고 생각했다. 그와 동시에 큰 의미 없이 살고 있었던 자신이 부끄러워졌다.

한국과의 교류를 통해서 나 자신이 어떻게 살아가야 할지에 대한 생각이 바뀌었다. 내가 만난 한국인은 모두 명확한 목표와 비전을 가지고 노력하고 있었다. 미래를 바라보고 나아가는 것이 매일매일을 열심히 사는 이유라는 것을 깨닫게 되었다. 단 하루도 의미 없이 보내지 말고 열심히 살자고 생각했다. 그들에게는 "진지함"이라는 단어가 정말로 어울린다고 생각한다. 나는 그런 기회를 준 친구들과 유학생 모두를 존경한다.



最優秀賞

제주도 여행이 준 깨달음

全彩香 [東京都]

“흑돼지, 성계 미역국...” 서울이야 많이 가봤지만, 제주도는 처음이라 그런지 몇 달 전부터 맛집 찾기에 여념이 없었다. 의녀 장금이 인생의 제 2막을 열었던 제주도. 많은 사람이 즐겨 찾고 세계 자연 유산에도 등재된 만큼 공항 가는 날을 손꼽아 기다렸던 것 같다.

제주 공항에 도착한 다음 금강산도 식후경이라 남편 친구가 추천하는 국숫집으로 향했다. 쫄깃쫄깃한 면과 살살 녹는 고기, 맛깔스러운 김치의 조합은 30 분이 넘는 기다림을 잊기에 충분했다. 오랜만에 한국에 온 남편도 시원한 국물이 그리웠다면 한 그릇을 똑딱 해치우고 배를 두드리고 있었다. ‘정말 끝내 준다’ 라며 연신 고개를 끄덕이던 우리, 참 행복해 보였다.

배를 채웠으니 이젠 비울 차례다. 한참을 걸어 다다른 금오름 정상에서 탁 트인 하늘을 바라보며 바람을 느끼는데, 남편이 제주 4·3 사건 이야기를 꺼냈다. 식민지 지배가 끝났는데도 대한독립 만세를 외치지 못했고, 광복의 기쁨 대신 참혹한 죽음이 엄습했던 제주도. 제주도민은 오랫동안 고통스러운 나날을 보냈다고 한다. 저 멀리 붉게 물들어가는 저녁노을이 맛집 블로그만 검색했던 나를 꾸짖는 듯한 느낌에 내 얼굴도 덩달아 빨개졌다. 슬프고 아름답다는 말이 떠오르는 순간이었다.

우리는 역사의 아픔을 마음속에 간직한 채 흑돼지와 ‘한라산’ 으로 허기를 채우기로 했다. 분명 배불리 먹었는데, 예약에 실패한 반딧불이 체험이 아쉽다는 핑계를 대며 통닭까지 사서 숙소로 돌아갔다. 그날 밤 제주 바다가 불러주는 자장가는 무척 달콤했다.

이튿날에는 해녀 체험을 하기로 했지만, 세찬 파도가 몰아치면서 바닷속을 볼 수 없었다. 전복을 잡아 신선한 회를 먹겠다는 꿈은 물거품이 되었지만, 물으로 일찍 올라온 덕분에 일본으로 이주한 제주도 사람들의 이야기를 듣게 되었다. 예전에 오사카에서 한국 음식을 먹었을 때, 나는 왜 쓰루하시에 한인타운이 있는지 궁금해하지 않았다. 대다수 일본인은 내가 그랬던 것처럼 드라마나 음악, 음식 등에 지나치게 주목한 나머지 그 배경에 숨겨진 이야기를 알려고 하지 않는다. 일본으로 건너간 제주도 사람들의 애환을 이해하면서 한국의 ‘맛’ 을 느끼는 사람이 많아지면 좋겠다.

흔한 여행안내서처럼 성산 일출봉, 갈치조림 등으로만 채울 뻔했던 나의 첫 제주도 여행기는 생각보다 훨씬 두꺼워졌다. 새롭지 않아야 할 이야기와 진실이 더는 새롭게 느껴지지 않고, 우리 모두 지나간 흔적을 겸허하게 짚어보는 날이 오기를 기원한다.

優秀賞

시 (詩) 와 함께하는 추억여행

南圭子 (千葉県)

한국을 여행하다 보니 시가 자주 눈에 들어온다. 버스정류장 쉼터광고에 게시된 한 편의 시, 서울 지하철에서는 승강장 안전문의 투명한 스크린에 붙어 있는 시들이 나의 눈길을 끈다. 그 순간 문득 시의 세계에 잠기는 내가 있다. 한국 대중교통에서 만날 수 있는 시들은 유명한 시인들의 작품 뿐만 아니라 시의 공모전에 선정된 일반시민들의 창작 시들도 포함되어 있다.

거리를 걷기만 해도 시와 만날 기회가 찾아온다. 부산의 해운대 ‘달맞이길’ 을 걷다가 작은 시화 안내판이 나타난다. 대구의 앞산 전망대로 향하는 산책길에는 ‘시인의 길’ 라는 안내판이 나를 맞이해준다. 산책로를 나아가면 시인의 안내 팻말이 세워지고 곳곳에 시들도 전시되어 있다. 편안하게 쉬엄쉬엄 읽으면서 올라가면 내 안에 잠들어 있던 문학적 감성을 깨운다. 그곳이 마치 자연의 갤러리 같다는 느낌도 들고 시들이 있는 풍경을 사진에 남기는 순간도 너무 상쾌하다. 이런 시와의 우연한 만남은 내 기분을 올려준다.

일본에서 이렇게 시가 눈에 뛰는 순간이 있을까? 내가 평소에 시를 접촉할 기회가 없어서 그런지, 처음에는 거리에 시가 있는 광경이 낯선 것이었다. 그러나 한국 사람에게서는 시가 친근하게 느껴지는 것이 아닐까 하는 생각이 들었다. 한국 드라마 속에도 연출의 하나로서 시의 구절이나 시집을 사용한 장면이 있었다. 한국에서는 낭만적이고 뜨거운 마음을 곧장 표현하는 사람들도 많은 것 같다. 비유적 표현도 많고 잘하는 인상을 받는다. 실제로 나도 한국 사람에게서 시집을 받은 적이 있다. 한국어 어학체험프로그램투어에 참가했을 때였다. 현지에서 아는 사이가 된 도움을 주는 분이 마지막 날에 한 권 책을 주셨다. 한국어와 일본어로 쓰여진 그 시집은 반갑고 고마운 선물이었다. 시집을 선물로 고르는 멋진 센스가 신선해서 기억이 남아 있다.

한국의 시에 관심을 갖게 된 나는 한국여행을 갈 때마다 들르는 곳이 있다. 그곳은 서점이다. 설레는 마음으로 마음에 드는 시집을 고르는 한 때는 흐뭇하고 힐링되는 시간이다. 그리고 한국 서점에서 책을 사면 책 아랫부분에 날짜도장을 찍혀준다. 여행을 한 날짜가 기록되어 더욱 추억이 깊은 한 권이 된다. 귀국한 후에 여행 중에 찍은 사진들을 보지만 해도 행복해지지만 한국에서 산 시집을 읽고, 그 스탬프의 흔적을 보면 더욱 추억여행을 즐길 수 있다. 이것이 나의 시와 함께하는 추억여행이다.

優秀賞

왜관철교가 가르쳐 준 것

川名木綿子 [東京都]

“가 보자 왜관!”

2019년 여름. 나는 경상북도 왜관으로 갔다. 왜관 여행은 특별한 의미가 있는 건 아니었다. 대구를 여행하다가 어딘가가 본 적 없는 곳에 가볼 작정으로 가게 된 여행이었다. 왜관이라는 지명에도 마음이 끌려, 나도 모르게 열차에 올라 있었다.

“여기보다 경치가 좋은 데가 있는데요?”

낙동강에서 셔터를 누르고 있는 나에게 어떤 남자가 말을 걸었다. 그 사람의 안내로 전망 좋은 반대쪽 물가를 향해 함께 다리를 건넜다. 미묘한 거리와 침묵이 이어지다가 그가 천천히 말을 걸었다.

“실은 이 다리는 원래 일본이 만든 거고, 6·25 전쟁 때 이 다리가 북한군의 남하를 막았거든요”

이 다리에 이런 역사가 있는 줄 몰랐던 나는 놀랐다. 자세히 물어보니 우리가 걸은 이 왜관철도는 100년 이상도 전에 경부선의 철도교로서 일본이 건설한 것이라고 한다. 그리고 1950년에는 북한군의 남하를 저지하기 위해 다리 일부를 폭파한 것이 계기가 되어 전시 상황이 호전한 것으로 ‘호국의 다리’라고 불리기도 한다는 이야기였다. 그 후에도 그는 나에게 왜관을 설명해줬다. 그냥 시작한 여행이 뜻밖의 유익한 시간이 됐다.

이 만남으로부터 1년이 지났다. 지금 한국 여행은 허전함을 감출 수 없다. 한일 관계 악화에 따른 일본 제품 불매운동이나 왕래 감소로 인한 한일간 노선의 축소. 뭔가 양국에 구멍이 뚫린 것처럼 서먹한 분위기를 느끼는 가운데 신종 코로나 바이러스의 영향까지 상황이 더욱 심각해졌다.

현재 이러한 상황 속에도 한일 우호의 필요성이 주장된다. ‘한일 우호를 위해 교류가 필요하다’라는 말도 자주 듣는다. 그럼 내가 무엇을 할 수 있을까? 집콕 생활 중의 나에게 과제가 됐다.

이럴 때 생각 난 것이 왜관여행이었다. 왜관철교에서 생긴 일은 교류라기에는 먼 사소한 일이었을 지도 모른다. 그러나 그때 다리에 얽힌 역사나 왜관 사람들의 마음 등 알게 된 것은 정말 많았다.

쉽게 한국으로 갈 수 없는 지금이 만큼 나는 할 수 있는 범위에서 한국을 적극적으로 이해하려고 움직였다. 모색하면 할 수록 지금 내가 할 수 있는 우호에 향한 기회가 펼쳐 지는 것 같다.

왜관철교에서 생긴 일은 우연이었지만 그 우연을 시작으로 교류가 움직이기 시작했다. 지금의 그 한걸음이 미래의 한 일 우호로 연결될 것이다. 이렇게 믿고 앞으로 나아가려고 한다. 다시 한국여행을 즐길 수 있는 그 날까지.

佳作

김치 덕분에 활력이 넘치는 한국 사람

宮久令子 [神奈川県]

조리사 면허를 갖고 있는 난 음식에 관심이 있기 때문에 당연히 한국 요리에도 관심이 높다. 그렇기 때문에 한국 문화인 김장을 한 번 경험해 보고 싶다고 계속 생각했었다. 한국에 사는 친구에게 무심코 한번 김장을 해보고 싶다고 메시지를 보낸 적이 있는데, 곧바로 답장이 와서 올해 김장하러 오라고 했다. 별명이 토끼 언니인 아줌마는 교외에 살기 때문에 호텔로 왔다갔다하는 게 힘들다며 우리 집에 묵으면서 일주일정도 같이 지내자고 가족들과 상의 없이 즉답이 왔다.

난 처음 김장 체험하러 한국으로 향했다. 토끼 언니 집은 한국을 좋아하는 사람이라면 누구나 동경할 만한 한옥이었다. 언니는 미리 재료를 사서 준비해 놓았다. 배추 20 포기와 무 등이 쌓여 있었다. 많지 않을까요? 하고 물으면 보통 200 포기 정도 하는데 이번엔 그 정도는 아니니까 괜찮다고 해서 난 놀랐다.

수백명 분의 식사를 만든 경험이 있는 나로서는 쉬운 일이라고 생각했는데 생각같이 쉬운 일은 아니었다. 배추를 소금에 절여서 양념을 만들기 위해 무를 썰는 데에는 많은 힘이 필요하고, 엉거주춤한 자세로 하기 때문에 허리 또한 무척 아팠다. 내일 양념을 무칠 것이라고 했는데 벌써 허리가 아픈 난 내일의 일을 생각하면 걱정이 앞섰다. 그렇지만 언니의 활력은 내가 생각하지 못할 만큼 넘치고 있었다.

“그럼 친구 집에 가자! 벌써 반찬도 준비했거든.”

한국 사람의 활력은 도대체 어디서 생기는 건지 마냥 신기하기만 했다. 아무튼 친구 집에서 맛있는 밥을 먹으면서 즐거운 시간을 보냈다. 그때 그들은 김장하러 한국까지 일부러 오는 일본 사람이 있다는 게 신기하다고 하면서 “힘들지?” 라고 해서 웃었다.

양념을 무치는 일은 즐거웠지만 생각보다 힘들었다. 근데 이 많은 김치를 어떻게 먹을지 난 궁금했다. 그런데 언니가 이건 일본으로 돌아갈 때 가져가라고 해서 너무 놀랐다.

며칠 후 일본에 돌아가기 하루 전날 언니가 방에 진공 포장한 김치를 대량으로 갖고 들어왔다.

“언니, 전부 갖고 갈 수 없어요. 중량을 초과해 버릴 거예요. 체중계 좀 빌려주세요”

그리고 슈트케이스에 가능한 한 23킬로그램의 김치를 넣으려 했다. 내 옷이나 짐은 다 배낭 안에 쭈셔 넣었다. 약 20킬로그램의 김치를 어떻게 먹으면 좋을지 생각했다. 그래도 막상 일본에 돌아와서 친구들에게 나눠주니 다들 너무 기뻐했다. 토끼 언니의 활력, 그리고 다시 경험할지 모르는 특별한 경험을 시켜준 것에 난 지금도 감사하고 있다.

佳作

돌아온 지갑과 함께 시작된 한국 왕팬 입문기

杉本翔生 [奈良県]

해외여행 중에 지갑을 잃어버린 사람들은 몇 명이나 될까?

분실한 지갑이 고스란히 자신의 품으로 돌아온 사람들은 또 몇 퍼센트나 될까? 나는 일본에서도 잃어버린 적이 없는 지갑을 여행지 한국에서 잃어버렸다. 하지만 이 해프닝을 계기로 나는 한국의 왕팬에 입문하게 된다.

친구와 저녁을 먹은 후에 인형 뽑기 놀이를 했다 잡힐 듯 잡히지 않는 인형을 아쉬워하며 30 분을 소비한 후 결국 하나도 뽑지 못하고 숙소로 돌아왔다. 밤늦게 찾은 한국 편의점의 원플러스 원에 신기해하며 고른 물건을 계산대에 올려놓은 순간 알고 말았다. ‘지갑이 없잖아! 숙소 안에는 있겠지.’ 숙소로 달려갔다. 마치 우사인 볼트 선수처럼 달렸다. 이 잡듯이 숙소를 뒤졌지만 지갑은 없었다. ‘게임 센터에 두고 온 걸까?’ 처음으로 등줄기가 오싹해지는 게 주운을 봤을 때보다 더한 공포를 느꼈다.

지갑 안에는 열심히 일해서 번 돈과 신용 카드, 각종 신분증이 들어있었다. 한국에까지 일본 운전 면허증을 들고 온 나를 원망했다. 게임 센터로 달려가 샅샅이 뒤져도 그 근처의 모든 가게에 들러 내가 아는 한국어를 총동원하여 설명하고 설명해도 허사였다.

다음날 아침에 아는 선생님께 도움을 청했다. 선생님께서 말씀하시길 한국 사람들은 분실물을 습득하면 우체통에 넣는 경우가 많다고 하시며 사흘 정도 기다려 보자고 하셨다.

사흘? 아니 세 시간 후 선생님께 연락이 왔다. 지갑을 찾았다는 것이다. 어제 갔었던 게임 센터에 가보니 한 아저씨가 나를 보고 방긋 미소를 지으시며 지갑을 건네주셨다. “감사합니다! 고맙습니다!” 내가 아는 한국어 감사 표현을 총동원하여 10 년 분은 족히 쓴 것 같다. 내 지갑은 나 다음으로 인형 뽑기를 한 사람이 발견하고는 다음 날 아침 가게 오픈 시간에 갖고 와 주었다. 지갑 안에는 모든 것이 그대로였다.

이러한 경험을 통해 나는 한국의 왕팬이 되었다. 내가 한국에 여행을 갔을 때 일본 텔레비전에서는 한국의 일본 제품 불매운동에 대해 연일 방송되고 있었다. 하지만 현지 분들은 우리를 따뜻하게 맞이해 주셨다.

이번 여행으로 이런 생각이 들었다. ‘멀리서 바라보고 지레짐작으로 그것에 대해 평가를 내리는 것은 정말 위험한 일 이구나. 직접 부딪히고 경험하면서 그 평가의 잣대를 바꾸고 키워 나가야 하는 것이 우리 젊은이들이 두 나라를 위해 해야 할 일이구나.’

나의 한국 왕팬 입문기는 엄청난 해프닝으로 시작됐지만 계속 업그레이드될 것이다.

佳作

한국 절 순례 여행

福士陽子 [東京都]

나는 한국을 좋아해서 젊은 시절부터 여행을 했지만 대부분이 서울과 그 주변 관광지를 둘러보는 여행이었다. 그래도 볼만한 장소가 많이 있으니까 그 때마다 새로운 발견이 있었다. 어느 날 친구가 해인사에 가고 싶다고 말을 건넸다. 절을 좋아하니까 해인사를 알고 있었지만 우리끼리 갈 수 있다고 생각하지 않았지만 살펴보니 고속버스나 KTX를 이용하면 서울에서 당일 여행이 가능한 것으로 나타났다.

그 해인사행은 잊을 없는 추억이 되었다. 여행 첫날에 서울역에서 티켓을 사고 기차가 출발하는 위치를 확인한 것도 귀중한 경험이 되었다. 다음 날 아침 일찍 KTX와 버스로 해인사로 향했는데 가는 동안 어릴 때 소풍처럼 긴장과 흥분이 계속되었다. 버스 정류장에서 걸어서 해인사 경내에 도착하니 대장경판각이라는 건물이 있고 안에 경전 목판이 보관되어 있었다. 여러가지 보존방법에 감동하면서 좋은 시간을 보냈다. 이 첫 경험이 한국 여행의 폭을 넓혀 주어서 시간이 걸려도 스스로 티켓을 구입하거나 사람들과 서툰 한국어로 말하는 것이 아주 즐거웠고 이것이 여행 묘미라고 생각했다.

몇번이나 절을 도는 여행을 한후에 일본에서 한국 33 관음성지라는 책자를 찾아냈다. ‘시코쿠 88 서준례’를 참고해서 한국 관광 공사가 2008년에 개창된 관음보살을 본존으로하는 33 절을 선택한 것이다. 그 다음은 책자에 나오는 절에 가기로하고 1년에 1~2번정도 여행했다. 한국 절은 교통이 불편한 곳이 많아서 지도로 가깝게 느껴도 하루에 2곳을 가는 것은 어려운 경우가 많다. 그러므로 하루에 한 곳에서 천천히 보냈다. 절에 있는 자원봉사자들과 말하거나 다방에서 전통차를 마시면서 보내는 시간은 매우 즐거운 시간이다.

또한 산속에 있는 절도 많고 버스를 내리고 나서 걷는 거리가 길데 아름다운 자연을 만끽하면서 먼 길을 걸으면 병풍같은 산들에 둘러싸인 절에 도착한다. 경내에는 평온한 공기가 감돌고 있고 그 곳에 있으면 저절로 마음이 진정된다. 이 분위기가말로 일본절에 없는 것이라고 생각한다.

최근에는 이전보다 회화를 할 수 있어서 즐거움이 더 늘었다. 그것은 절 앞에 있는 식당에서 산채비빔밥을 먹는 것이다. 집 여주인과 이야기하면서 맛있는 밥을 먹는 시간도 행복하다.

지금까지 간 절은 현재 33곳 중 23곳이다. 아직 가지 못한 절에 앞으로 가는 것이 쉽지는 않다고 생각하지만 갈 수 있기를 바라고 있다.

佳作

한국에서 만난 우연한 인연들

山極尊子 [埼玉県]

2020년 2월의 밤, 호텔을 나와 남편과 경복궁역 근처에 있는 한 식당에서 삼겹살을 먹고 있었을 때 일어난 일이다. 조용히 식사를 하던 도중 갑자기 엄청난 환호성이 식당 내에 울려 퍼졌다. 깜짝 놀라 주위를 둘러보니 모든 사람들이 삼겹살 굽던 손을 멈춘 채 TV에 시선이 머물러 있었다. 화면 속에서는 ‘봉준호 감독의 기생충, 아카데미상 4관왕’이라는 자막이 나오고 있었다.

옆에서 돼지갈비를 먹고 있었던 중년 아저씨들은 “봉준호는 괴물이라는 영화를 만들 때부터 뭔가 해 낼 거라고 생각했어” 라면서 친구들과 건배로 기쁨을 나누고 있었다.

나 역시도 기뻐다. 아시아 영화 최초 아카데미 작품상 수상!

같은 아시아인으로서 너무도 자랑스러운 마음이었다. 나는 흥분한 나머지 무심코 주변 사람들에게 “축하합니다.” 라는 인사말을 건넸다.

옆 테이블의 아저씨는 온화한 미소로 “축하해 주셔서 감사해요.” 라며 우리에게 악수를 청하셨고 좋은 정보를 주셨다. 기생충의 촬영지가 바로 여기 경복궁역에서 멀지 않다는 것이다.

우리는 식사를 마치고 그분들이 알려주신 촬영지로 향했다. 택시를 잡고 운전사에게 목적지를 말하니 “기생충 촬영지네요.” 라고 웃으며 촬영지인 자하문 터널의 끝에 맞닿은 계단까지 우리를 안내해주셨다.

우리가 택시에서 내리니 기사님도 같이 택시에서 내리면서 “사진 찍어 드릴까요?” 라는 따뜻한 말을 건네주셨다. 우리는 기사님의 호의에 감사하며 영화 속 포즈를 재현하며 사진을 찍었다.

나중에 기사님께 돌려받은 카메라를 들여다 보니, 백여 장이 훌쩍 넘는 우리의 사진들이 있었다. 좋은 사진을 남겨주려는 기사님의 마음에 너무 감동받아 이 사진들을 한 장도 삭제할 수가 없었다.

그 날, 기사님께서 또 다른 특별한 촬영지를 알려주셨다. 그건 바로 피자집이었다. 우리는 그 피자집에 들어가 음식을 주문하면서 주인아주머니께 축하 인사를 건넸더니 주인아주머니는 “지금까지 외국인 손님을 별로 없었는데 먼 곳까지 찾아와줘서 감사해요.” 라면서 기뻐하고는 촬영할 때 사용한 피자 박스를 우리에게 보여주었다.

우리는 한국의 따뜻한 정을 간직한 채 시내까지 걸어 내려갔다. 그때 평소 내성적이고 표현을 잘 하지 않던 남편이 내 손을 꼭 잡으며 “당신 덕분에 추억에 남는 여행이 되었네.” 라고 말했다.

진심으로 건넨 ‘축하해요’ 라는 한마디가 이렇게 큰 추억을 선물해줄지 몰랐다.

한국에서 만난 우연한 인연들.

절대 잊을 수 없는 행복한 추억을 우리에게 선물해주셔서 감사드립니다.

最優秀賞

清水由加里〔大阪府〕

会えずとも 想いを手話で サ・ラ・ン・ヘ・ヨ

優秀賞

苺谷菊子〔神奈川県〕

ハンゲルを がんばる私に 老いは無し

仲川暁実〔愛知県〕

帰国後に木箸が軽く感じられ

佳作

清田三四郎〔神奈川県〕

ハンゲルと 妻の心は まだ読めぬ

松木精司〔大阪府〕

杖置いて 仙遊島公園 春惜しむ

相田香菜子〔神奈川県〕

尋ねれば 皆で指差し 道案内

金剛明夫〔埼玉県〕

コロナ禍で 離れたオモニ 憂う夏

最優秀賞

大谷信子〔神奈川県〕

화면 속 나를 손으로 만져 보는 늙은 어머니

優秀賞

横川実咲〔新潟大学〕

왕십리에서 도착한 작은 집에 여름의 추억

前田侑〔北星学園大学〕

택시 기사님 그렇게 서둘러서 어디 가세요 ?

佳作

南圭子〔千葉県〕

약령시 골목 건강해질 것 같아 걷기만 해도

渋谷祐熙〔青山学院大学〕

사람과 사람 한일을 잊고 있는 마음과 마음

佐藤康予〔東京都〕

한국 동화책 찾으러 책방 골목 나만의 시간

及川奈緒〔北星学園大学〕

버스 기사가 무서워 내렸더니 여기 어디야



A series of horizontal lines for writing, consisting of 20 evenly spaced lines that span the width of the page.

駐日韓国文化院

駐大阪韓国文化院

www.koreanculture.jp

www.k-culture.jp